

おっちゃんとインチョウの イタリア旅行

大橋永美

新星出版

目次

1	はじめに	4
---	------	---

2	ローマ1日目	10
	旅の準備	4
	体力勝負だ！	6
	退職したら…	8

3	ローマ2日目	26
	イタリア旅行の初日	10
	エアバスA380	10
	Romagna通り	12
	ボルゲーゼ美術館	14
	見るべき作品のリスト	17
	スーパー Pan	22
	Airbnb 鍵のあけかた	24

4	ローマ3日目	44
	ヴァチカン美術館	26
	サンタンジェロ城	34
	ピザマルゲリータ	40
	コロッセオ	44
	こみこみのコロッセオスリ対策	48

5	ヴェネツィア	64
	カピトリニ美術館	50
	トレビの泉	54
	プラダを着た美女	61
	Italo	64
	イタリアの列車	69
	サンタ・ルチア駅	70
	サン・マルコ広場	75
	スプリッツ	79
	バカーロ	81
	フエーチェ劇場	83
	ヴェネツィア2日目	86
	サン・マルコ寺院 トウカレ宮殿	86
	アカデミア美術館	90
	アカデミア美術館	106
	メデイチ家礼拝堂	108
	スケベオヤジ	110
	中央市場のナイトツアー	113

6	ヴェネツィア2日目	86
	アカデミア美術館	90
	アカデミア美術館	106
	メデイチ家礼拝堂	108
	スケベオヤジ	110
	中央市場のナイトツアー	113

7	フィレンツェ1日目	105
	アカデミア美術館	106
	メデイチ家礼拝堂	108
	スケベオヤジ	110
	中央市場のナイトツアー	113

8	フィレンツェ2日目	118
	ウフィッツィ美術館	118
	サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂	124
	ベッキオ橋	132
	パラティーナ美術館	134
	ふたたびローマへ	138
	Room91	140
	Airbnb鍵を どうやって受け取るか？	140
	ローマの路上駐車	144
	ポポロ広場	146
	Non Solo Pizza	148
	地下鉄でおっちゃんスリにあう	153
	バルベリーニ宮殿(国立古典絵画館)	156
	トリア・パンフィーリ美術館	158
	Orvieto	162
	ローカル線の乗り場は5分間違えないように…	162
	よしー次はローカル線だ	166
	Civita di Bagnoregio	166
	チンタ・ディ・バニョーレの猫たち	170
	Orvieto 市街	172

9	ふたたびローマへ	138
	Room91	140
	Airbnb鍵を どうやって受け取るか？	140
	ローマの路上駐車	144
	ポポロ広場	146
	Non Solo Pizza	148
	地下鉄でおっちゃんスリにあう	153
	バルベリーニ宮殿(国立古典絵画館)	156
	トリア・パンフィーリ美術館	158
	Orvieto	162
	ローカル線の乗り場は5分間違えないように…	162
	よしー次はローカル線だ	166
	Civita di Bagnoregio	166
	チンタ・ディ・バニョーレの猫たち	170
	Orvieto 市街	172

10	Orvieto	162
	ローカル線の乗り場は5分間違えないように…	162
	よしー次はローカル線だ	166
	Civita di Bagnoregio	166
	チンタ・ディ・バニョーレの猫たち	170
	Orvieto 市街	172

11	ローマ最終日	178
	共和国広場	176
	サン・ピエトロ大聖堂	178
	カプチーノ・カフェ	180
	おわりに	184
	番外編	186
	ローマの歩き方	186
	1月1日	188
	1月1日午後	198
	1月2日	202
	1月2日午後	204
	1月3日	210
	1月3日午後	212
	1月4日	218
	Ottavianoのカフェ	222
	「おっちゃん？ ローマってどうだった？」	224
	光と翳	224
	日本に帰って……	226
	あとがき	228

12	ローマ最終日	178
	共和国広場	176
	サン・ピエトロ大聖堂	178
	カプチーノ・カフェ	180
	おわりに	184
	番外編	186
	ローマの歩き方	186
	1月1日	188
	1月1日午後	198
	1月2日	202
	1月2日午後	204
	1月3日	210
	1月3日午後	212
	1月4日	218
	Ottavianoのカフェ	222
	「おっちゃん？ ローマってどうだった？」	224
	光と翳	224
	日本に帰って……	226
	あとがき	228

13	ローマ最終日	178
	共和国広場	176
	サン・ピエトロ大聖堂	178
	カプチーノ・カフェ	180
	おわりに	184
	番外編	186
	ローマの歩き方	186
	1月1日	188
	1月1日午後	198
	1月2日	202
	1月2日午後	204
	1月3日	210
	1月3日午後	212
	1月4日	218
	Ottavianoのカフェ	222
	「おっちゃん？ ローマってどうだった？」	224
	光と翳	224
	日本に帰って……	226
	あとがき	228

14	あとがき	228
	「おっちゃん？ ローマってどうだった？」	224
	光と翳	224
	日本に帰って……	226

1 はじめに

旅の準備

おっちゃんと言チヨウは、

2019年10月イタリアを旅行した。私たちは、とくに還暦を過ぎた。このごろ二人でちよくちよく話すことは『引退したら、どこで暮らす？』だ。少しの間でもいいから、どこか外国で暮らそうか…

海外で長期ステイしたい。

そういう望みが胸の奥にはあるが、いまだに実現していない。この前のフランスもよかったな。

じゃあ、今度はイタリアなんかどうかな…というノリで、ちょこっとイタリアを旅することになった。

今回は10日の旅だ。

最初にローマで3泊、つぎはヴェネツィアに移動して2泊、そこからフィレンツェで2泊、最後はローマに戻って2泊する。それ以外の都市はきっぱりとスルーすることにした。山峡の村や海辺の町などは、いずれまた訪れることにしよう。

フライトはエミレーツの零時発。

深夜便だとフルに仕事を終えてから空港に向かうことができる。しかも中継のドバイは離発着の時刻が正確で乗り継ぎが短い。夜間を有効に利用できるので私たちはもっぱらエミレーツ航空を利用している。

それぞれの都市の移動は高速鉄道・Italoだ。Italoはオンラインで座席を購入すると早割引が大きい。本数が圧倒的に多いトレニタリア・Trenitaliaにするか？少し迷ったけどおっちゃんは奮発してクラブ・エグゼクティブつまり特等席を予約した。

ホテルはBooking.comだ。

さてと。フライトと列車とホテルはすんなり手配できた。ところが、ここからが大変だ。

イタリアの著名な美術館や旧跡はPiticketをオンラインで購入するだけではダメ。ガイドツアーを事前に予約しないと、入り口に並んでから入館するまでにめちゃくちゃ時間がかかるらしい。ネットの情報によれば数時間も列に並ぶそう。

美術館の公式URLからpiticketを購入することは簡単だが、それだけでは待ち時間はまるで短縮されない。

ガイドツアーであれば一般客とは別のガイド専用入口から指定時刻に入場できるそう。

おっちゃんも言チヨウも現地に着いてから窓口でチケットを購入すれ

ばいいか？と気楽に考えていたが、そんな呑気な手合いではないらしい。「えっ!? the house をオンラインで購入するだけでは簡単に入場できないって？」

「入場待ちの長蛇の列をスキップするにはガイドツアーが必須だって！」

私たちが昔むかしイタリアを旅行したころに比べて、かくもツーリズムは変化している。旅行者の数が増えているのだ。

ガイドツアーを検索すると多数がヒットする。涉猟できるあまたであるガイドツアーの集団がガイド専用の入り口から一斉に入場するらしい。

なるほど…殺人的ラッシュだ。

おせおせ、ぎゅづぎゅづのコロッセオ、ヴァチカン美術館、サン・ピエトロ大

聖堂を想像して、私たちは、はや準備の段階でおおいにげんなりした。こうなったらシカタガナイ。

日本を発つ前にガイドツアーを購入するのだ。おっちゃんは何時間もPCに向かってる。

体力勝負だ！

「体力勝負！」という声が、どこからともなく聞こえてくる。

おっちゃんとインチョウは入念に目的地を絞り込むことにした。

どこに行くか？である。

どこに行くか？を決めたら、決して目的地以外には行かないこと。

あっちこっちと欲張るのはやめよう。これだけは絶対にはずせないという一点に集中するのだ。

ローマ

1日目 ボルゲーゼ美術館

2日目 ヴァチカン美術館

3日目 コロッセオ

ヴェネツィア

1日目 アカデミア美術館

2日目 サン・マルコ寺院と

ドゥカーレ宮殿

フィレンツェ

1日目 アカデミア美術館

2日目 ウフィッツィ美術館

サンタ・マリア・デル・フィ

オーレ教会

ローマ

1日目 予備

2日目 予備

3日目 予備 午後3時には空港へ

ローマに戻ってのち3日間はずべて予備とした。

予定通りにスケジュールを消化できるかどうかはわからない。

予想以上にはかどって、他にもいくつかの美術館を巡ることができれば幸運だろう。嬉しいオマケだと思っ

しかし人生はスケジュール通りに行かない。

嬉しいオマケばかりではない。

嬉しいオマケだってついてくる。

退職したら…

突然ではあるが…

インチョウは60歳で引退する計画をたてていた。

たてていた。というのも、すでに64歳である。60歳で引退はかなわなかった。ただのユメだ。

60歳で引退して、さて何をしよう…とハッキリとした計画があったわけではない。一つの区切りとして60歳から別の人生を始めたい。そんな漠然とした思いがあった。

50代に始めたベトナムとケニアでの定期診療を徐々に増やして、海外へと医療の軸足を移そうと考えた。

59歳の誕生日にはクリニックを丸ごと引き受けてくれる医師も見つかった。

てほぼ契約にこぎつけた。バンザイ！いいよ引退。

ところが計画は頓挫した。その数年は医院を引き継いでくれる別の医師を探して奔走したが、64歳のいまそれは実現していない。宙に浮いた計画はもはやたち切れたのだ。

いっぽう…

おっちゃんは、健康診断で腫瘍マーカーの値が高値が発見された。悪性腫瘍の疑いでいま精査の段階だ。

おっちゃんは退職したらいろいろとやりたい事があった。夢があった。それも、いまはペンディングだ。

「オレの余命3か月」おっちゃんは毎日ぼやくのだ。

このように私たちのどちらもペンディングだ。年をとるってそういうことだと思っ。

仕事をしながら子育てに追われて、ようやく子どもが巣立つと、つぎは老親介護に追われる。そして両親を見送って、なんとかひと区切りつくころには自身の人生の最終章に追われる。

いずれ70歳ともなれば体のどこかに不安があって海外長期ステイなんぞ、おっちゃんもインチョウも心の片隅にすら思い浮かばないだろう。人生ってそういうものだ。

私たちは前々から暗黙裡に了解していたことがある。

もし、どちらかの身に医療が切実に必要な事態が生じたなら、そのときは、片方がもう片方の介護に全力であたること。最優先事項を相手の幸せに定めることである。

おっちゃんが悪性腫瘍でひっかかったときは、もちろんパニックだ。猛烈にジタバタしたけれど、それも時が経つうちに想定内のことだと理解できて、いまは二人とも冷静で、年をとれば癌などというものは必ず我が身にふりかかるものと受け入れている。ニッポン人の2人に1人が癌なのだ。私たちの両方が癌であったとしても不思議でもなければ不運でもない。2人で乗り越えるのだ。

こうやって人生の最終章はある日突然に幕を開ける。思いもかけなかった不意打ちをくらわす。それが人生だ。

2 ローマ1日目

イタリア旅行の初日

関西空港を深夜11時45分に出たエミレーツは、翌朝4時50分にドバイ着。ドバイでは乗り継ぎが4時間ほどで、ローマに着いたのが昼過ぎの13時25分。フィウミチーノ空港からローマの中心までタクシーでほぼ1時間だ。

エアバスA380

私たちはエミレーツ航空を頻繁に利用するが、わっ！これほどデカイ飛行機を見たのは初めてだ。エアバス

A380。

シロナガスクジラみたいな巨体である。2階建て。上階はビジネスとファーストクラスでカクテルバーやラウンジがあって、シャワースパやパーソナルベッドにはミニバーもある。空飛ぶホテルだ。もし上階に空席があれば直前割引もある。搭乗前日でもビジネスクラスにアップすれば比較的安値で同じサービスを受けることができる。

ラウンジでお酒を飲んでシャワー、ミニバーのあるベッドで眠ることができるとなると、空の旅は快適だと思う。さぞかしぐっすり眠れるだろう。

私たちはビジネスクラスへの割引クーポンをどうするか悩んだ。

(どうする?)

(ま、いいか?やめとこ)

関空からドバイまでの10時間のフライトならビジネスクラスで水平のベッドに眠れたらさぞ楽だろうね。と思ったけれど、ドバイからローマまでの6時間も、またまたエアバスA380であった。

このエアバスは製造中止が決まっているそう。



Via Romagna



Romagna通

ローマの宿はAirbnb。

ボルゲーゼ公園近くのRomagna通り。ものすごく古い建物だ。広いリビングとベッドルームとキッチンがついていて長期滞在にはぴったり。

風呂にはバスタブがあって、たよらないがチョロチョロとぬるいお湯がでる。エアコンが各部屋についていて快適だ。

エレベーターがあつて助かった。重いスーツケースをひきずって4階まで階段をのぼることを考えたら、恐ろしく旧式であれエレベーターがのろろと動くだけでもありがたい。

すぐ近くにスーパーがあつて一通りの食材はそろつた。

Romagnaは官庁街のようで、私たちの部屋の真下はイタリアの自民党ローマ支部とかかれている。近くに豪華なつくりのアメリカ大使館があり、数メートルさきには日本大使館の日の丸も見える。静かで落ち着いた場所である。

玄関で出迎えてくれたのはローラさん。掃除など部屋のまかないを任されている。愛想よくキッチンや風呂場、家電の説明をすませると「用事があればいつでも電話してねーチャオ!」と去って行くとした。

「あーおばちゃん!ちよつと待った!」インチョウは、ねちっこい性格である。入り口の3メートル以上ある分厚く重い木の扉の開け方と、エレベーターの使い方をしつこく聞いた。

鍵は玄関と中庭と個人の部屋の3か所にある。エレベーターは各階の鉄格子と内側の木の枠を食器棚みたくまん中でボタンとあわせるように開閉する。手動だ。

おばさんは、いとも容易く「ほら!こつやつてこつやるとこつなりまゝす」とやって見せて「簡単でしょ」といなすと、ニッコリ部屋を出て行った。

このとき、自分たちで実際に試験しなかったことで、あとあと大変な目にあう。

ローマの古い建物の扉は高くて分厚くて重い。慣れない日本人にとって鍵は固くて動きにくい。そして錠穴の木の枠が激しく歪んでいる。そう簡単には開錠できないのである。

Galleria Borghese

ボルゲーゼ美術館

その日は午後5時からボルゲーゼ美術館に行く。チケットは1か月前からオンラインで予約しておいたので、部屋に荷物を放り込むと急いでボルゲーゼ公園に向かう。

5時に間に合うのだろうか…

私たちは焦った。

ボルゲーゼ公園の大きな森は建物の後ろにまっすぐ見通せるのだが、濃い緑のこんもりした丘陵には美術館、博物館、ラファエロの別荘、噴水などが広い敷地に散らばっていて、どの方向が美術館なのか？迷わずに最短でどりつかねばならない。私たちは走った。ボルゲーゼ美術館は完全予約制で、すでに入場を待つ人が入口に腰かけ

ていた。予約した5時きっかりにガイドツアーが始まった。

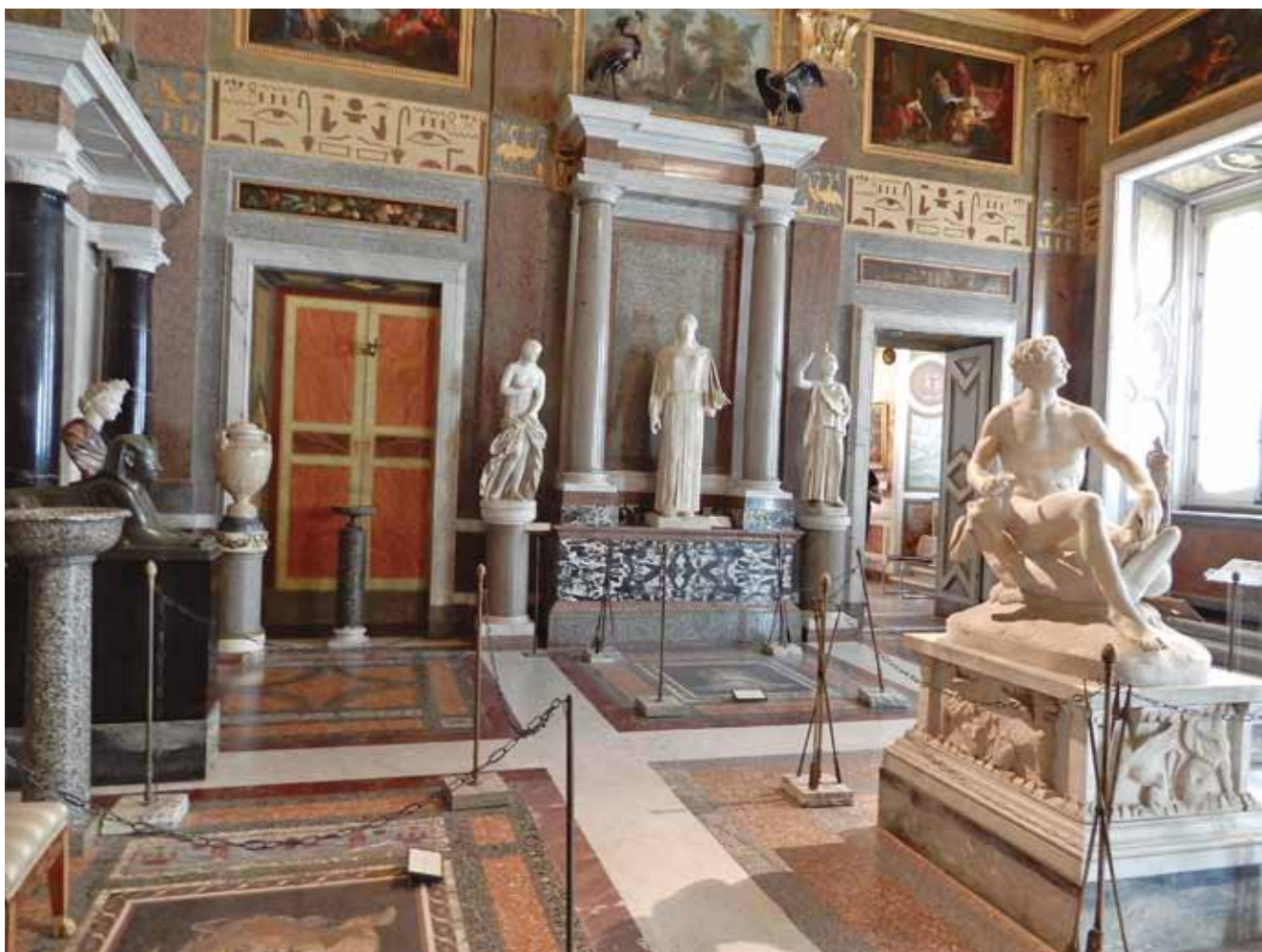
5時から7時までのツアーであるが、すべてイタリア語である。おっちゃんはいタリア語を話すがいンチヨウは英語しかわからない。英語の音声ガイドを借りる。

レンタルできる音声ガイドは、ほぼ何語でもそろっていたが、中国語と韓国語がしっかり組まれているのに日本語はなかった。

私たちが訪れたのは日曜日でイタリアのすべての美術館が無料であったが、予約がなければボルゲーゼ美術館には入ることができない。

入り口で私たちがパウチャーを見せてチケットを受け取っていると、横のデスクで一人の青年が「ここまで





ノーと言ったらノーである。
 青年はしばらく粘って見たもののあ
 きらめて去って行った。

見るべき作品のリスト

リストといっても、インチョウはあ
 とから調べて知ったのである。

ローマ初日は空港からボルゲーゼ美
 術館へと急げや急げっ！で、
 いったいボルゲーゼ美術館に何があ
 るのか？どれを見るべきなのか？ほ
 とんど考えもなしに走りこんだ。

「あく見たぞ見たぞ！」

はるばる来たのだから何とかして入
 館したい」と訴えていた。受けつけ
 嬢は「ここは完全予約制です。3か
 月前からネットで予約してね」と譲
 らない。その青年は「ボルゲーゼ美
 術館のサイトに不具合があり、オン
 ラインで予約画面が開かなかった。
 何度もトライしたのだ」とスマホを
 見せながら説明していた。

（ほら。これ。美術館のサイトに入
 れないのだ。見てよ）

まことしやかなウソ…ビュートイフ
 ルな詐欺だよね…こういいうい訳は。
 受けつけ嬢は一步も譲らない。



「ワハハハハ：見た見た見たよねっ」
ぐっちょりと満足感があつた。

「スゴイナア」

「うんスゴイ！」

おっちゃんもしばらくは言葉がでない。何がどうスゴイのか言葉にできないが、いやあくとにかくスゴイ。

部屋に戻ってから、ルンルンと荷物を整理して、さてと：

ねちっこい性格のインチョウは、ネットでボルゲーゼ美術館のオサライをしているうちに

「あ…これは見た」

「いや。これは見てないぞ」

一つひとつチェックしていくうちにポロポロと見逃しを発見。

「おっちゃん。この絵ってどこにあつた？」

おっちゃんも「はあ？こんなどこにあつたの？」になる。

ボルゲーゼ美術館における、どこにあるのか気がつかずに素通りした多くの失敗を轍として、インチョウは前夜にネットで予習してから翌日の美術館に臨み、帰ってからオサライすることにした。

前夜におけるチョコチョコとした予習と復習は大事だと思う。

美術館で売られている分厚いガイドブックなんかは全ての収蔵を解説するから、とうてい読める分量ではない。館内で持ち歩いたところで重くてかさばるだけだ。

ですから「これだけは絶対にはずしてはイケナイ！」的な予習が効果的である。それにはネット情報だ。体験者のブログがいい。最低限見なくてはイケ

ナイものだけに絞るのだ。それ以外は気に留めない。完全にスルーだ。

ローマ1日目は、さんざんな失敗だった。ポロポロ見落としがあつた。ものすごく有名な作品でも、そうとは知らずに素通りした。なにしろ素の状態でイキナリ超エース級の美術館に飛び込んだのだ。無謀だ。

ローマ2日目、3日目もダメ。惨敗だった。予習がまったく追いつかなかった。

作品の見落としだけではなく。館内で迷子になった。

地下道をうろついたらあげくカフェにぶちあたったり、誤ったルートでまっしぐらに出口に出てしまった。

美術館の図面や目的の作品までのルートもシッカリ予習すべきだ。



どの建物も想像以上に広い。複雑に入り組んでいる。迷路だ。
おまけに地下や庭にも見どころは多く、地下で別棟にも通じていて別館にも多くの展示があったりする。どこになにかがあるのか？地理的な把握が重要である。
図面でのシミュレーションなんて思いつかなかったナ。
しかし4日目、5日目と進むにつれて、おっちゃんもインチョウも次第に腕をあげていった。要領を得て鋭くなった。遠くからでもすーっと一直線に飛び込んでくる。心にずしりと重量でぶつかってくる。作品が発するオーラ

に感性が研ぎ澄まされていった。
おっちゃんはイタリア語に慣れてくると館内の案内を読むのが早くなった。それでも、最終日のサン・ピエトロ大聖堂みたいに超有名な教会においてすら失敗はあった。うっかり宝物殿を素通りしてしまった。

前夜に予習しておいても、やっぱり現場でボカをやるのだ。収蔵品が多く最高級のものがたくさんで気が動転して、あっちこっちに視線が分散されてしまう。

ま、そういうものを見落とさないためにこそ、国家資格を持つプロのガイドは存在するんだよね。

そして、アパートから美術館への道順。このシミュレーションは想像以上に大切である。美術館へのルートを前夜にチェックして到着時刻を予測して

おくのだ。Googleナビが頼りだ。そうすれば最寄りの地下鉄が工事中で動かないこともナビ情報で把握できる。



牛乳1リットル
 ピザ1ホール
 コロッケ（電子レンジでチンすると
 中のチーズがとろとろ）1箱
 これイタリアの家庭料理の定番なの
 か？あちこちで見かける。
 ホッカッチャ1枚
 ワイン2本
 ビール3本
 洋ナシ8個入り1パック
 以上で€19。パリに比べるとすごく
 安い！

スーパーPan

スーパーはPanのほかにカルフル
 Expressなんかがある。Expressは
 目の前でサンドイッチやパニーニを
 注文通りに調理してくれるし、量り
 売りの惣菜があつて夕飯に一品か二
 品ちょこつと買って済ませるには
 ちょうどよい。

いっぽうPanは冷凍のTVディナー
 が充実しているし、惣菜はあらかじめ
 パックにつめられていて複数のま
 とめ買いだと値引が大きい。

水2リットルボトルを2本
 ヨーグルト
 サラダ
 ハム2パック



Airbnb 鍵のあけかた

Airbnbの最大の問題は鍵である。古い建物の一部屋をAirbnbで借りるとき、鍵問題は避けて通れない。パリでもそうだった。シャンゼリゼ通りで私たちはずいぶん苦労した。鍵がいくつもあるし、すんなりとは開かない。ここローマでも鍵は最上級の懸念だ。

ネチッコイ性格のインチョウは、管理人から鍵を受け取るときに、どうやって開けるのかしつこく聞いたけど本当に鍵が開くのだろうか。彼らが「簡単です…」というのを信じてはイケナイ。

鍵は建物の玄関、中庭からエレベーターにつづく共有部分、そして各人の部屋

の3つにある。2つ目の共有部分がどうしても開かない。中庭は広々して採光に配慮されたガラス扉であるがエレベーターの踊り場は吹き抜けて風雪で劣化しやすい。恐ろしく旧式の鍵穴はゆがんでいる。

「鍵が開きません」

ローラさんは、何度か呼び出しに応じてきてくれた。一時間近く頑張ってくれたけれど、偶然にせよカチッ！とひっかかる音はすれど、重く分厚い扉は開かない。ローラさんもギブアップ。「この鍵は取りかえます。明日はテーブルの上に新しい鍵を置いておきますね」と約束してくれたけれど、それが果たされることはなく、ずっと鍵には悩まされた。



Piazza San Pietro

3 ローマ2日目



ヴァチカン美術館

9時15分のバチカンツアーを予約した。ヴァチカン美術館の入り口に集合。私たちのツアーは50人ぐらいで、ほとんどがスペイン語かフランス語圏の人たちであったが、東南アジアとアメリカからの夫婦は英語を話す。ガイドが何語でもまるで関係ない。というのは、ガイドは入り口のセキュリティチェックを通過すると参加者一人ずつにチケットを手渡し

て、ハイさよなら！グランチエーと言って帰るのだ。

ガイドツアーに参加すると一般客とは別の入り口から入場できるので長〜い行列をスキップできる。そのためガイドなので専用の入り口さえ通過できればOKだ。彼らに館内の作品を解説する知識はない。

美術館の近くには「当日いきなり入れるツアー」の呼び込みがたくさんあって、入場券を買うために並んでいる数百人は超えると思われる列にダフ屋は大声で「ツアーに入れ」と勧



誘っていた。これなら事前のネット予約がなくても列をスキップできると思う。

9時15分のチケットを持っている私たちが、ヴァチカン美術館の入り口に並ぶことができたのは10時過ぎで10時40分には入館できた。もしチケットがなければ切符売り場に2時間か3時間は待つ。そこからセキュリティチェックがあつてそこでも待つ。やはり専用の入り口から入れるガイドツアーはありがたかった。

ヴァチカン美術館の混み方は尋常ではない。時間帯にもよるが殺人的といってもおおげさにはあたらないと思う。

9時〜10時すでに館内はすし詰めだ。自分の意思で前に進めない。立ち止

まることも難しい。

“Keep going. Don't stop!”と警棒みたいなスティックで監視員にずっと前へ前へと急かされて、しかも、ぴしっと張られたロープが道順を厳しく指定するので、勝手に見たい絵画に向かうことはできない。

ほぼすべての人はシステイーナ礼拝堂の「最後の審判」とラファエロの「キリスト変容」と「アテネの学堂」そして「ラオコーン」に走るだろうから、絶対にそれは許されないシステムになっている。

走るところか、ロープで定められた道順をちょこつとでもそれたら、ピピッと元に戻されるのだ。「地図のギャラリ」も同じで途中で「コミコミ」がピークになると、入り口である程度規制されるようだ。ここでちょっ



Musei Vaticani



ネは人気の作品を保護する企てだと思っ。
 絵画館は比較的すいていた。私たちは絵画館は2度見ることができた。独自の戦術を編み出したのだ。名づけてコバンサメ作戦！
 その日は韓国人のパッケージツアーが20組ぐらいあったと思う。韓国の団体が40〜50人でやってくるので、ひとつの部屋は彼らで埋め尽くされまったく前が見えない。一つの韓国グループが去ると、また次の韓国グループが押し寄せる。
 私たちは、韓国グループが一つ去るとその瞬間にすわっと部屋に駆け込んで、次の韓国グループが入る直前に、ささっと次の部屋へと走るのである。一つの韓国軍団のお尻にガシッとくっついて彼らが次へと移動する瞬間

と待て！と。お目当ての絵画に行く前にロープで大きく迂回させられる。つまり目玉商品に突撃できない仕組みになっている。
 これは、殺人的ラッシュによって生じる事故、たとえば混雑が嵩じて人垣が崩れて圧死する。などを未然に防ぐ目的に思えなくもないが、ホン



Scuola di Atene

間に素早く最前列に躍り出るのだ。このやりかたがグッド！軍団が次へと移動するすきまにもぐりこむとややほっとする空間で鑑賞できた。

パッケージツアーの数は最多が韓国。次にインド？そしてアメリカのリタイア老人組。中東や南米もかなりの数だ。中国は総数は多いがあちこちにちらばっているのさほど目立たない。

いずれにせよ30年前にあんなにたくさんいた日本人のパッケージツアーは、Tapisのワッペンを胸にはった75歳超と思しき老人一組しか見ず、かわりにどの部屋もハンガルの旗をもった添乗員が先導している。

どこにあったのか？私たちが発見で

外に出てしまう。これが決定的な失敗であった！

美術館の外に出てしまったのでシカタガナイ。ヴァチカン市国の堀に沿って歩く。サン・ピエトロ広場までやってきて、さてサン・ピエトロ大聖堂を見渡して驚いた。

冗談でしょ？！

午後3時ともなるとサン・ピエトロ広場には大聖堂に入る順番を待つ列が、おおげさでなく三千人ぐらいに達しており、どこが最後尾か？目を凝らしてずうっとおっかけてみたが、行列は3周ぐらい広場を囲っている。ハイ！あきらめました。

サンピエトロ大聖堂に入ることはきっぱりやめて出直すことにする。

きなかったのはラオコーンだ。ラオコーンは八角形の中庭にある。おっちゃんもインチョウも中庭にまで注意が及ばなかった。そういえば庭にたくさん人だらかりがあった。あゝ、あれが八角形の庭なんだ…なんだ…そつだったのか…

ぼちぼち3時だ。5時間ほどヴァチカン美術館のなかをうろついたことになる。おっちゃんもインチョウも、美術館からサン・ピエトロ大聖堂に行こうと考えた。

ネットにはサン・ピエトロ大聖堂はシステリーナ礼拝堂出口の右手脇道から通じているとあった。

しかし、私たちはヴァチカン美術館からサン・ピエトロ大聖堂に通じる小さな通路を発見できずにいったん

Castel Sant' Angelo



おっちゃんとインチョウはサンタンジェロ城に入る。
サンタンジェロ城はサン・ピエトロ大聖堂から一直線。目の前に見えているので歩いて10分足らず。そこからナヴォーナ広場まで10分あまり、さらにパンテオンまで5分。そのさき10分か15分ほど歩くとトレビの泉だ。

サンタンジェロ城

ローマ帝国ハドリアヌス帝の建築で墓、

要塞、監獄、非常時には秘密の地下道で通じている大聖堂から教皇の避難所になるなど多様な使われ方をした。屋上からはサン・ピエトロ大聖堂がバッチリ写真に納まる。
サンタンジェロ城は入場料が€14。ほかの美術館が€12前後なのでバカ高く感じるのだろう、入り口で料金を見てパスする人が多い。私たちの前にいた10人ほどの列は€14と知るや引き返した。







Piazza Navona



Piazza di Spagna

トレビの泉は観光客であふれておりスペイン広場に続く界隈はブランドショップが軒を連ねる。泉の前を歩いてスペイン広場の階段をのぼって、RomagnaのAirbnb#で歩いて30分ぐらゐ。

すぐ傍のパンテオンはほぼ完全な形で残っているローマ建築の神殿で内にはラファエロの墓がある。



Pantheon di Roma

ナヴォーナ広場の中央にはベルニニの彫刻四大河の噴水がある。周囲はレストランのテラス席だ。

Pizza Margherita



ピザマルゲリータ

ピザマルゲリータはサンタンジェロ城からスペイン広場に向かう途中の奥まった路地にある目立たないレストランで食べた。

そこは、地元の銀行員が役所勤めがラUNCHに使うらしく3時過ぎでも若い会社員たちがにぎやかに商談していたが、私たちが入ると彼らはちょうど勘定を済ませるところだった。ウエイトレスさんは20歳そこそこでほんのりぼっちゃり。話し方もおっとりとしている。こういう飾り気のないイタリア娘は明るくてちょっとイイな。

ピザマルゲリータはトッテモ美味しいのだけど塩辛い。

おっちゃんのスラムとチーズの前菜にも焼きたてのピザが、かごいっぱいに添えられていたけどやっぱり塩辛い。私たちはヴァチカン美術館を出てからずっと歩きおしで暑い日ざしにあつたせいか？塩辛い料理のせいなのか？とにかくのどが渇くのでビールとワインをかけつけ3杯がばがば飲んだ。インチョウは酔っぱらったけど、貧乏性なので「あちこち見なければならん！」とせっついてグイグイ歩くものだから完全に酔いが回ってフラフラ。部屋に戻ってベッドに横になったとたん寝てしまった。そのまま夜中まで



目が覚めなかった。よほどくたびれたのか？明け方にちょっと目が覚めたが、また寝てしまう。
フリーズドライの白米を持ってきてよかったよ。しんどいな…と感じたら、白米のおかゆと乾燥わかめの味噌汁だ。どちらもお湯を注ぐだけ。やっぱり日本人は米のメシに限る。



4 ローマ3日目

コロッセオ

この日は、

コロッセオとフォロ・ロマーノ、パ
ラティーノの丘を半日で回るツア
ーだ。真正正銘のガイドつき。ローマ
生まれのエリザベートさん。ローマ
大学で考古学を専攻、ただしそれも
数十年昔のこととか。

9時45分コロッセオに集合。

アメリカ人夫婦が5組、フランス人
夫婦が1組、アイルランド人の新婚
さん1組、カナダからの新婚さんな
ど合計40人ほどだ。アジア人は私た
ちだけ。

アメリカ人は引退した老夫婦たちで
70歳は超えている。



10時入場のはずが、前のグループも
その前のグループもセキュリティ
チェックでつかえており、1時間
半ぐらい入り口で待つ。

靴はみなさんスニーカー。新婚の若い
カップルは、まっさらのNBだ。老夫
婦は登山シューズ。そこでゆとりの
ある老後を楽しんでいるらしく、みな
イタリアは初めてだという。

エリザベートさんの説明によると、
コロッセオは西暦80年に完成。収容
人数は8万人。地下、アリーナ、4
階の観客席からなる。アリーナは半
分だけ蓋が再現されているようだ。
円形闘技場のプログラムは午前中が
猛獣と剣闘士の闘いだ。昼は罪人の
処刑が行われ、午後は剣闘士同士の
闘いで、地下には猛獣の檻と剣闘士
の待機場所があり、ゾウやライオン
など猛獣の入った檻を地上に持ち上
げる巻き上げ装置がアリーナの一隅
にあった。剣闘士が登場すると観衆
は熱狂したという。身分によって観
客席は別で、1階は貴族、2階は騎
士、3階は一般市民、最上階は奴隷
と女性と定められていた。奴隷たち
の退場を遅らせるために、最上階の
階段は非常に狭く傾斜が急に造ら



Colosseo



れており、身分の高い階層を先に帰す工夫がなされていた。コロッセオの最上階には、日除けのカンバスを張るポールの穴が残っている。カンバスの布帛は地中海各地から献上され、地方によって織地にも特色があったという。人々が最も興奮したのは水上の海戦。アリーナに水を張って実際に船を浮かべて海戦を模した。そのための水道橋や地下水路などが遺っている。



こみこみの「ロッセオ」 スリ対策

それにしても老人たちが貴重品をしつかりと腰にゆわえているのはどうなんだろう。アメリカの田舎町から来た老夫妻はすべて腹巻ちゃんだ。スリから見たら「貴重品が入っているぞ」「あそこを狙え!」といったように見えるだろう。

もしスリが本気で狙うなら、老人の腹帯をかっさらっていくに違いない。中高年の女性に多いのが小さなポシェット。コンパクトだが、あれは

ヒタクリやすい。いいカモだ。大きなリュックは美術館ではロッカーに預けるように指示されるが、ポシェットは持ち込み自由なことが多い。

腹巻もポシェットも、せいぜいはした金だろう。スリは、そもそもはした金をくすねるのだ。大金を暴力で奪い取る行為は立派な犯罪になる。スリが狙うのは些少の金額だし日常茶飯事なので警察もいちいち取り締まらない。

インチョウは臆病で用心深いのでスリに狙われてもみ合ったすえに命を落とすぐらいなら金ならくれてやる! さっさと持っていけ! である。インチョウは、パスポートは持ち歩かない。ホテルに隠しておく。

カードは海外に持って行かない。盗まれたら大変だ。旅行はだいたいになる。なのでキャッシュしか持たない。しかし財布は持たない。€20と50の紙幣をあっちこっち10か所ぐらいに隠し持っている。

服のポケットかハンケチや手帳にはさんでちよろちよろ隠しておく。コインは複数のポケットに入れる。

(ときどき自分でも、どこに隠したか忘れてる)

紙幣を落つことなどなんちゃない。また稼ぐだけだ。

アメリカ人のように、腹巻をベルトにゆわえてパンツの内にぎゅうぎゅう押し込むぐらいなら、インチョウはポシェットの€50をさっさと差し出す。



んからフォロ・ロマーノを眼下に見晴らせる。

タブラリウムは紀元前78年に造られたローマ公文書館であったが、その後は牢獄や倉庫として使われていた。地下に「マメルティーノの牢獄」の遺構があり見学できる。ここはすっかりスルーしてしまった。

屋上はカフェになっていて、ここからローマ市街を一望できる。

スタッフ3人ですべてを切り盛りしているのだから、サンドイッチどれでも5、ケーキどれでも2.5、フルーツはすべて3というように単一な会計が能率的だ。ワインとビールはケースから自分で取り出す。

屋上はたいへん広くテーブルもたくさんある。持ち込みをテラスで広げてもゼンゼンOkayだ。



カピトリニ美術館はフォロ・ロマーノの一隅に接った現役の市庁舎でコロッセオから歩いて15分ほどだ。見学する予定ではなかったけれど、コロッセオでたっぷり時間をとっても午後1時半だ。よし行こう。

カピトリニ美術館

カピトリニ美術館はおすすめだ。ミケランジェロが設計したカンピドリーオ広場を囲んで右側にカピトリニ美術館、中央にローマ市庁舎、左側に新宮がコの字型に建っている。美術館の前の階段もミケランジェロだ。

これら3つの建物が地下の通路で繋がっており、この美術館に入って地下道からエレベーターでローマ市庁舎の屋上に上がる。市庁舎のてっぺ





Musei Capitolini





Fontana di Trevi

トレビの泉

トレビの泉はたいへん混雑していたが、泉の前にあるジェラート店の上階がルーファーデンになっていてトレビの泉を見下ろすことができる。私たちがジェラート売り場の狭い階段を屋上まで上がると、そこは思いがけず広々としたラウンジで、幸運にもテラス席が空いていた。



も？とびくびくしたけどビールが€5。ワイン€8。少々値がはるけどふっふっふっ…極上の穴場である。

ルーファーデンには、ほかに客がいた。

ちびりちびりと酒を飲んでページを繰りながら、奥に腰かけているオッサン。いいオンナ（オトコ？）がいないかな…というように見える。

誰かに声をかけられるのを待っているのだろうか。

「ねえ、おっちゃん。あそこのカウンターに腰かけてバーボンちびりやりながらパーバックス読んでいるおやじ。あれ、なんのつもりかなあ？わざわざトレビの泉で小説読む？」

「あれは現地調達だろう。オンナを



ひっかけるのかも？いや？
ひよっとしてホモオヤジで
オトコを漁っているかも」
「ねえねえ、おっちゃん。
じゃあ、ルーフパラソルの
下でカクテル飲みながらチ
ラチラ流し目線のあのオン
ナ。あっちも現地調達？」
ふふふ：

このように、男なり女なり
が独りで思わせぶりに腰か
けていると、現地調達の烙印
を押されるのだよ。

現地調達はこの後もあちこ
ちで見かけた。その場で恋
人募集だ。これ想像以上に
多いです。ホント。

4〜5人の女子グループも

いる。ブランドショップで買ったド
レスやバッグやコスメをテール
いっぱいにわさわさ広げて戦利品を
あれやこれやと吟味。女子会談義
だ。そうとうにレベルの高い美女た
ちである。化粧もシロウトには見え
ない。上から下までパリッと気合に
満ち満ちた若い女だ。

これだよ〜イタリア女は！

あとはアメリカおばちゃんグルー
プ。5人ぐらいでわあわあ騒々しく
盛り上がっている。女も年増になる
と傍若無人になる。

テレビの泉を20分ほどぶらぶら歩い
て部屋に戻って夕飯にする。今夜は
残飯整理だ。Pamで買ったニョッ
キをゆでて醤油とわさびで食べる。

ところで

私たちが宿泊したAnticaは、とてもよかった。滞在に必要なものはすべてそろっている。調理器具も食器も洗濯機に乾燥機、アイロン、カプチーノマシンまである。

窓が天井まで高くて明るい。中庭に面しているのでとても静かだ。



ここなら半年でも快適に暮らせると思う。

近くにアメリカ大使館の贅沢な敷地があって地下鉄まで歩く道すじに大使館の専用車のゲートがある。警備は銃を装填してゲートを通過する車の検問は厳重だ。爆弾を検知する機械で車両の下面まで厳重にチェックする。私たちが大使館の前の歩道を歩くのさえ「ストップ！道路の反対側を歩け！」と銃で制された。

これを安全とするか？もしくは危険とするか？ワカラナイ。が、軽犯罪などは少ないと思う。

建物を一歩外に出るとボルゲーゼ公園の大きな森の緑が、鮮やかに目に飛び込んでくる。朝早くに散歩したらさぞすがすがしいだろう。私たちはこの場所がとても気に入った。



上階に住んでいるおじいさんと毎朝階段ですれ違うのだが、犬の散歩にボルゲーゼ公園を歩くようだ。同じ

棟に住むフェラーリの美女もウィットンやプラダのバッグを嫌味なく持っている。セレブの優雅な暮らしぶりを朝夕に眺める幸せはこの場所だけで。

ただ一つ
鍵の問題を除けば。
またもや鍵が開かない。なんどやってもダメだ。部屋に入れない。



まっ赤なフェラーリの若いカップルが偶然帰ってきた。
彼らはすごく親切。おっちゃんといんちヨウが鍵を開けるのを時間を厭わずに手伝ってくれた。が、彼らもついにギブアップ！

「ありがとう。もう行ってください。ごめんね」「チャオ」
部屋に入れないで途方にくれていると、あ、ようやく鍵が開いた！

プラダを着た美女

どうして観光地にブランドショップがひしめいているのか？

おっちゃんとインチヨウは、いままで観光とショッピングはまったくベツモノと考えていたがイタリアでは観光地イコールブランドショップピン

グだ。これ常識のようだ。
トレビの泉からスペイン広場までブランドショップがガッツリとりまいている。
旅行気分のノリノリで買物するのかな？

あるいはプラダを着て写真に納まりたいのかな？
たったいま買ったばかりのドレスを着て自撮りする女性もいる。うしろに値札をつけたまんまでトレビの泉で撮影している女の子を見た。

「もしもし…あの、値札が背中にくら下がっていますけど」
インチヨウがトントンと声をかけると、彼女は「えっ?!」と背中に手をやってタグを裏返した。



Venezia

5 ヴェネツィア

Italo

ローマのテルミニ駅からItaloでヴェネツィアに向かう。

9時14分の発車まで1時間あまりテルミニ駅で待つ。あとから知ったのだが私たちは特等席だから、エグゼクティブのラウンジで優雅に過ごせたはずだ。立ち飲みカフェする必要などなかったのだ。惜しかったな。(何事にも予習は大切なよネ)

ローマからフィレンツェ、ナポリ、ミラノ、そして私たちのようにヴェネツィアまでの時刻表の前で、発車

乗り場が掲示されるのをスツーカーを脇に待っている。

2階にあるカフェからも電光掲示板を見下ろすことができるので、おっちゃんインチョウウは2階から時刻表をにらんでいる。

あとあとItaloに乗る回数が増えると、気がついたがItaloはTrenitaliaに比べると発車レーンが掲示されるのがすごく遅い。直前なのだ。レーンが掲示されるや、遅れてはならじ！すわっと、大きなスツーカーを押しながらホームに走ることになる。

私たちは一散に走った。13両ほどある車両の特等席は1両目。つまり先端なのだ。おっちゃんは奮発して特等席を予約したからホームの端までそれ！ダッシュ！

ヴェネツィア行きの列車は20分ほど遅れて到着したが、終点サンタルチア駅に着いたときには2時間以上遅れていた。

テルミニ駅を発車すると車掌が私たちの席まで来て「現時点ですでに到着が40分遅れる見込み」と申し訳なさそうに告げた。

「えっ！たったいま乗ったばかりですでに40分遅れることが見込まれる？」とビックリした私たちが「どうしたの？」と聞くと

No.No.どうもしない。事故ではない。

今のところの予想が40分であって、またのちほど連絡します。と立ち去った。親切な車掌さんは「いま1時間遅れる見込み...」「1時間半遅れそうだ...」「いや1時間45分だ」などと律儀に報告してくれる。気のいい青年だ。





Termini

13時10分にサンタ・ルチア駅に着く
はずが15時40分ごろになった。車掌
のいちゃんの予測は正しく2時間
以上遅れたのである。
理由はなにもない。ただ列車がゆっ
くり走っているだけ。
それにしてもフランスのTGVは速

かった！めっちゃめっちゃ速かった！
「Italo」は、場所にもよるが普通にも中
途で追い抜かれるほどゆっくりだ。
日本の新幹線に慣れていると「いっ
たいつになったら加速するんだろ
う…」といぶかるが、最後まで拍子
抜けするぐらいゆっくりだった。

ローマーフィレンツェ	1時間30分	€20~50
ローマーナポリ	1時間10分	€20~35
フィレンツェーヴェネツィア	2時間10分	€25~55
フィレンツェーミラノ	2時間	€30~55
ミラノーヴェネツィア	2時間30分	€20~55

イタリアの鉄道は料金が安い。私たちはレンタカーではなく列車で移動することにした。トレニアリア Trenitalia とイタロ Italo がある。

5都市ミラノ→ヴェネツィア→フィレンツェ→ローマ→ナポリは早割だと€20~30からだが、当日駅で購入すると€35~55超と倍以上になる。日程が決まったならネットで早めに切符を購入するに限る。

トレニアリアとイタロの所要時間はほぼ同じで正規運賃、割引運賃も大差がないが、ネットで見るとイタロのほうが割引率の高い席が多く残っている。

のちにローカル線に乗ってみて、

イタリアの列車

ローマで超コミコミはヴァチカン美術館とサン・ピエトロ大聖堂だ。あの長蛇の列はすごかった。

コロッセオもコミコミだ。行列をスキップするためには、事前にガイド付きチケットがあるほうがいい。

『おっちゃん。ローマってどっだったっ?』

innoの車内サービスは上々。私たちは特等席だけあって、ランチボックスやらお菓子やら飲み物などを次々に持ってきてくれる。車窓はどこまでも広がる牧草地。斜面はブドウかオリーブだろうか？低木を栽培している。

景色を眺めてぼんやりしたら、ローマって、いったいなんだったんだろう。

私たちは日本で予約しておいたボルゲーゼ、ヴァチカン、コロッセオの3つをこなしたのちは、どこに行っても待たずに入館できた。ローマは名跡や美術館が近距離なので、つぎつぎと徒歩で回れる。Googleナビのおかげで道に迷わず一直線で到達できた。ポータブルのWi-Fiが役に立った。これは必需品だ。

かれこれローマの反省点を整理するうちに終点につく。

こつこつ時間って大切だ。列車の旅だと待ち時間が長いし、車内でWi-Fiと電源が使えるからゆったり考えをまとめることができる。旅行ってこういう時間が大事なんだね。記憶を整理する時間ね。



ローカル線があまりにも安いことに驚く。えっ！鉄道運賃ってこんなに安いんだ?!

なのでGoogleで出発地と目的地を入力して候補にあがってくる列車の所要時間と値段をざーんぶ検索してみるとよい。普通でも急行でも、特急と遜色ない時間で移動できて値段は半額という選択肢もヒットする。



サンタ・ルチア駅 ヴァポレット

ヴェネツィアではヴァポレットと呼ばれる水上バスがみなのものである。私たちは始点のサンタ・ルチア駅から終点サン・マルコ駅までヴァポレットで移動したが、水上からほとんどの観光スポットを鑑賞できた。ヴァポレットで運河沿いにヴェネツィアを見ると大きく総体がつかめると思う。サンタ・ルチア駅から正面にトルコ商館、サンジェレミア教会、ドルフィンマニーン館、ドイツ商館、リアルト橋、アカデミア橋など。サン・マルコ終点の対岸にサンタ・マリア・デラ・サルターテ教会も見える。

Venezia Santa Lucia



値が張るけど、この荷役のおじさんはすごくあり難かった。もし彼がいなかったら迷路のような石路で迷子になっていたと思う。それにひょうきんなおじさんでとても愉快。

おっちゃんもインチョウも次々に視界に現れる水上絵巻物に興奮してシャッターをきり続けた。運河沿いに見える建築は、水路に正面を設えた構築であるから船上から鑑賞するのがベストだと思う。

一回券€7.5。プラーノ島、トルチェッロ島、サン・ジョルジョ島へ行くなら24時間券€20もちょっぴりお得感があるが、ヴェネツィア本島内はヴァポレットを使うより徒歩で移動した方が断然速い。歩きの人が船を追いつくのを何度か見た。

終点で下船したのち、細い路地や橋が多いヴェネツィアの石段を大きなスニーカーをひっぱってホテルまで歩くのはとても難儀だ。そこでポーターを雇う。2つの荷物でも25。



宿に着くとトラブルが発生。

「えっ？部屋がない?！」

「部屋がないのだ!!」

「Hotel dell'Opera」は数か月前に予約したにもかかわらず空き部屋がない。

オーバーブッキングだ。ショック！私たちがHotel.comやBooking.Comでダブルブッキングに遭遇したのはこれが初めてであるが、ネットによればヴェネツィアでは頻繁に生じるらしかった。

おっちゃんは声を荒げる。

「どうなってんだっ!」

インチョウはねちっこい性格だ。

こついう交渉にはじんわりお願いする。フロントと喧嘩せぬようにやり取りオ・ネ・ガイするのだ。

フロントのおにいちゃんは焦っている。近所に空いている部屋はないか？片っ端から電話攻勢。ようやく近くのホテルに一つの部屋を見つけてくれた。特上の空きがあったと。翌日には当ホテルでも一室あくので「Hotel dell'Opera」の極上の部屋を用意しますと。

Okay. Thank you! 交渉は成立。

おっちゃんはブチ切れて口をきかない「彼らがthe best room we haveなんていうのはあてにならない。嘘っ



「ばちだ」と決めつける。でも私たちが泊まったのはホントウにthe best room they have だった。最高だ。予約していなかった朝食もシッカリご馳走になったし、結果オーライだ。上手におだてるとイタリア人はなんとか骨をおってくれる。フロントのおにいちゃんは必死で一軒一軒、近所に空いている部屋を尋ねてくれた。こちらが爆発してしまうと、彼らはものすごく焦る。はたで見ているほうが気の毒に感じるほど焦ってしまう。焦るところな結果にはならない。インチョウはフロントのおにいちゃんの額から汗が一つとしたり落ちるのを見た時、思わずおでこをなでなでしてあげたくなった。とにかく落ちつきましょう！

トラブルはある。予約にダブルブッ

キングはつきものだと思う。私たちは初めて遭遇したけど、この先もあつたとしてもおかしくない。

サン・マルコ広場

サン・マルコ広場で屋台みたいな荷を引っ張ってるお兄ちゃん、お姉ちゃん。Ｔシャツや、日傘や、トートバッグ。いかにも安っぽい土産物の露店

を横に見ながら裏手に続く狭くて細い路地を入ったスタンドだ。

サン・マルコ広場みたいに派手な観光スポットは人だかりも多く、どのカフェもバカ高くてまずいと想像されがちである。でもそのスタンドは違った。おっちゃんは「こんなところで食ってもゼツタイニ美味しくない」と見向きもしない。でもインチョウはなん



ちゃんは「えーっ?! ホントにそんなにたくさん食べるわけ?」しかしインチョウが絶賛するので、おっちゃんも一口食べて「わっ! 美味しい!」アンチョビーとサラミをポテトに混ぜ混ぜして練りこんだようでレタスと相性がよい。こっちはチーズ、ポテト、ツナそれにほうれん草とズッキーニ? もしかしてナス? よくわからないけど、めちやくちや美味しい。パン生地がしっとりねっとりもちもちして甘いのだ。パンそのものがうまい。ハムの塩味が効いている。バターも舌にまったりする。チーズとレタスの歯ごたえもしっかり。

となくその店が気に入った。

このサンドイッチはものすごく美味しい。こんなの食べたことない。インチョウは一口食べるや「あっ! このサンドイッチ、めちやくちや美味しい!」

ビックリしてあれもこれもと急いで3つも頼んでしまった。

1つ目を一口食べて「えっ! どうしてっ!」

2つ目さてこっちはどんな味かな?

「うわっ! 美味しい」

3つ目じゃあそっちはどんな味?

「えっ! めちやオイシイ」次々に口にほおりこんだ。美味しい。猛烈に美味しい。

「あれと、これと、それからあれも。あ、それからあのサンドイッチも」とガラスケースを指さして、インチョウが次々に注文するのでおっ

「よしっ! 今日はここでメシ食べて帰ろう」明日もここにしよう「おっちゃん早くも明日の食事をここに





決めている。

私たちは「このサンドイッチが、なぜ？こんなに美味しいのか？」確かめようと腰を据えた。二人してほぼすべての種類を、かたっぱしから試そうと、はや6時になった。

ビールも美味しい。インチョウが店の冷蔵庫からビールを勝手に取り出して、栓抜きで開けるのを見て

おっちゃんは「こんな観光地丸出しのところでビールなんか飲んでもおいしくない。どっかほかに行けば？」と最初はぼやいていたが、

「あ、これ地ビールだ」おっちゃんも地ビールのあまりの美味しさに何本もおかわりした。

6時を過ぎると突然わさわさと若者が入ってきた。

店のおばちゃんは4分の1ぐらいの

大きさに切りわけたまかないのサンドイッチを大皿にぎっしり並べてカウンターにデんと置くと、にいちゃんたちに食べる食べると薦める。

「あっ！」よく見たらさっき見た顔だよ。サンマルコ広場で傘とTシャツを売ってたあんちゃんだよ。

6時に露店をたたんだらここに立ち寄って一杯ひっかけろのだ。あんちゃんたちは立ったままでビールを飲んで、むしゃむしゃ食べる。一口サイズのサンドイッチの皿はどんどん空になる。と、おばちゃんは次の大皿をガラスケースから出してカウンターにガシッと置く。

あんちゃんたちはグイッと一杯ひっかけてすぐに立ち去った。5分ぐらい？長居はしない。このあと用事でもあるのか？これからまた一仕事なの

か？それともまっすぐ家に帰るのか？すると別のあんちゃんが店に顔をだして、サンドイッチをつまんで飲んで出ていく。あ、このあんちゃんも広場の露天商だよ。さっき見た！

スプリッツ

そのうちに、

サン・マルコ広場の宝飾店で働くねえちゃんたちが入ってきた。立ったまま透き通ったオレンジ色のドリンク。フルッツが入っている甘〜いお酒。これスプリッツっていうらしい。カンパリソーダとワインを混ぜたような甘〜いお酒だ。

こいつをグイッと一杯ひっかけておつまみを食べる。スプリッツを頼むとおつまみが食べ放題らしい。ガラス



約束したらしい。

ケースの上に置いてある爪楊枝みたいなピックがさしてあるコロッケだ。彼女らはちよつと立ち話をする
と立ち去った。

そうか…ここは地元のあんちゃん、
ねえちゃんのたまり場だ。仕事帰りに
ここで一杯やるのだ。

店のおばちゃんは、店で出すサンド
イッチの切れ端を一口サイズに取り
おいて彼らが来るとまかないサンド
イッチを出してやるのだ。そんな常
連たちの間に日本人が挟まってカウ
ンターで、もしかもしや食べている
のが珍しいのか？

中国人観光客がどさどさ入ってきた
のを機に私たちは帰ることにした。
おっちゃんはイタリア語であんちゃ
んらとなにやら冗談を言っている。
あんちゃんに「明日も来るから」と

インチョウが店をでよつとしてリュッ
クを肩にしたとき「マダム…」と突
然声がした。振り向くとおばちゃ
んがまかないのパンニーニを私たちの
テーブルに一皿運んでくれた。えっ！
Thank you! 美味しい！ホントい
い家族なんだ。お母さんと息子の2
人で盛り盛っている。

バカーロ

ヴェネツィアには、バカーロと看板に
ある飲み屋もあって、そこは昼間か
ら呑み助がカウンターに肘をついて
飲んでいる。夜明け前から仕事して
帰りにちよいつと寄るのだろうか？
酒だけをゆっくりゆっくり飲んでい



Teatro la Fenice

る。かなり強い酒だと思う。ホンモノのバカーロは女の手料理っぽいつまみなんかは、おいていない。おやじが立ったままで酒だけを飲む。グラスにアルコールだけを注ぐのだ。魚フライやミートボール、ピザなんかを置いているバカーロはtouristだ。観光客だけでいっぱいしているし運河沿いで雰囲気もよい。ちょっとしたつまみとワインでも10前後とうまいこと観光客を釣り込む。ホンモノのバカーロは呑み助が強い酒を飲んでぼさーっとしている乾いた場所である。

すつと立ち去るのと同じ。かかせない習慣であり儀式みたいなものだ。翌朝ふたたびサン・マルコ広場のカフェに行ってみた。朝早くからやっている。狭いカウンターでみんな立って食べる。サン・マルコ広場の露店、荷役、水夫、そういった力仕事のあるちゃん、おっちゃんが入れ代わり立ち代わり入ってきてコーヒーとパンを食べるとすぐに出ていく。力仕事でニンゲンは充足するのだと思う。働くこと、イコール体で稼ぐこと。そのために朝コーヒーとパンを食べる。帰りに一杯やる。この連続が生きているということだ。ニンゲンってこの連続で一生を終えるのだ。単純だけれど素晴らしい。

フエニーチェ劇場

その夜は8時からオペラを観る。オペラ劇場フエニーチェの裏に位置したホテル「Hotel dell'Opera」だからオペラ鑑賞は選択肢のひとつだ。ただし値段は€300以上。最安値の天井桟敷でも€100を超す。3時間半の舞台だ。私たちは運河沿いでミニサイズのオペラを鑑賞したけど8時から10時半までの2時間ちょっとでも80だった。迷路のように入り組んだ細い運河の奥まった二階にあるミニオペラは、背の高い建物に囲まれて日がささない。昼中でも薄暗く、まるでうっちゃられた廃屋のようだ。

その夜8時を過ぎて路地に灯りが

L'opera



とるころ、館の2階まで上がって「へえ…こんな場所で本気でオペラをやるんだ」とようやく実感できる。一つの演目が終わると、次の部屋に移動する。曲ごとに場所を変えて4つか5つの部屋を次々と移動してオペラの名場面を披露する。セビージャの理髪師、椿姫など。途中でシャンパン休憩もあって8時から10時半までたっぷり聴かせる。天井が高くて古い屋敷には観客が百人ぐらいいただろうか？ドイツ人が半分ほど、アメリカ人も3分の1ぐらいいたと思う。アジアは私たちのみ。「ヴェネツィアは特別の街だ」とカザスからやってきた夫婦が言う。こんな場所はめったにない。

Piazza San Marco

6 ヴェネツィア 2日目

サン・マルコ寺院
ドゥカーレ宮殿

この日はサン・マルコ寺院とドゥカーレ宮殿のガイドツアーだ。

ドゥカーレ宮殿は、ヴェネツィア共和国の歴代の総督の住居であり政治を行う場所であった。各部屋の壁と天井にはティントレット『天国』ヴェロネーゼ『ヴェネツィアの勝利』ティツィアーノ『祈りを捧げるグリマーニ総督』などヴェネツィア派画家の大作がびっしりと画かれている。

ドゥカーレ宮殿の牢獄は宮殿の裏の通路でつながっており処刑場、カサノヴァが閉じ込められていたという鉛牢獄や屋根裏などと通じている。

ガイドはモニカさん。長身の美女でヴェネツィア生まれのヴェネツィア育ち。ヴェネツィア大学の日本語学科を卒業して東京で4年ほど日本語を勉強したという。東京の下町が好きで、中野や下井草に住んでいたらしい。日本の下町とヴェネツィアは似ているという。でも最後は五反田に引っ越したけど、ちょっと誇らしげにつけくわえた。

流暢な日本語でヴェネツィア共和国の歴史を説明してくれた。イタリアが統一されたのはごく最近であって、もともとは独立した州であった。

(ふふふ…でも最近って？いつよ！)
ローマ帝国の歴史からみたらほんの最近かもしれないけどね…

モニカさんの体からはイタリア各州の相克の歴史がニュアンスとして発せられる。イタリアだけではない。

モニカさんの言葉の端々から、ヨーロッパにおける多民族の喧んだ深い淵を窺うことができる。国家の名のもとに一つに統合されていても民俗の習わしはしっかりとあって、ひとりひとりの胸にはヴェネツィア人としての誇りがある。それは簡単に消せないDNAの刻印である。

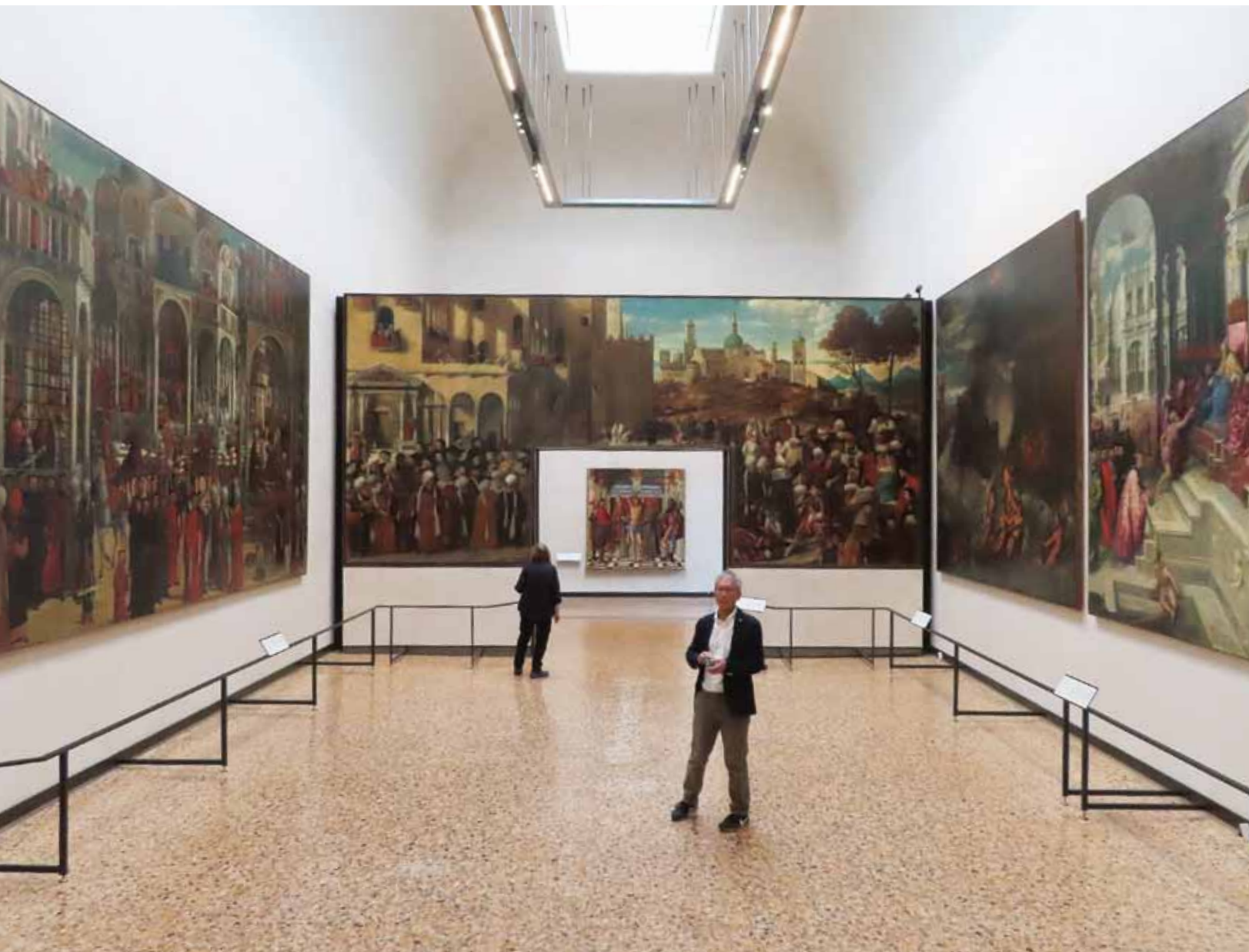




Palazzo Ducale

記録的な潮位でヴェネツィアが水浸しになったとき、サン・マルコ広場には観光客のために簡易な歩道がかけられて、皆がその橋げたの上を歩いたという。広場は絶えずぬかるんでいるように見えるが、それには理由があって、満潮で水位が高くなると地下をくぐって潮が排水できるように、ところどころ石畳に穴があけられている。満潮のときには海水が吹きあがつて低い場所にたまっている。近年、潮位の上昇は深刻で政府も高潮対策に本腰を入れているらしい。

Galleria dell' Accademia



アカデミア美術館

つづいてアカデミア美術館に向かう。
こちらは観光客で賑わうアカデミア
橋のもとにあるが館内は閑散とし
ている。

多くはヴェネツィア派の画家だが、
フランドル派の異色の画家ヒエロニ
ムス・ボスの作品を3つも展示して

いる。小品であるからうっかり見過
ごすところだ。なんで？オランダの
画家の絵がここにあるのか？不思議
なことにボスの絵はしっくりとヴェ
ネツィアになじんでいる。ヴェネ
ツィア派はヴェネツィアにおいてこ
そ本来の力量を発揮する。フィレン
ツェとはまるで異なるし、ローマと
も決定的に違う。匂いたつような異
質のエクゾティシズムを感じる。



Galleria dell'



Accademia





アカデミア美術館の隣にあるスーパ―に立ち寄る。中国人の若い夫婦が営むよろず屋で品ぞろえは上等だ。食料からチマチマした小物までなんでもある。いろんなものが雑然と入り口から奥の奥まで積まれている。中国人って目のつけ所がよい。アカデミア橋のたもと、ヴェネツィアのと真ん中に、こういうフツウのよろず屋は必要だ。おおいに助かる。世界のどこに行こうとも、地の果てであれ、砂漠のまん中にだって中国人の雑貨屋はあるのだ。こういう商才ってどうか勘違ってすくいい。

アカデミア橋のたもとのレストランは満員だ。

ウェイターは3人だけ。たったそれだけで50人以上出入りする狭い店内を

きっちり仕切っている。海に面した玄関の小部屋にはテーブルが10ぐらいで客が30人ぐらいいたと思う。奥にも中庭に面した土間があって、こちらは大きな長テーブルが5つほど。ここも30人ぐらいいた。レジのおねえさんも、ずいぶん若くて綺麗だ。そのぷつくりと美しい横顔からは想像できないほど、きびきびと機転が利く。全体を見渡してバシバシ指示をだす。厨房でもコック2人がガッツリ働いており大忙しだ。きびきびと頭はキル。そしてタフだ。

夜はサン・マルコ広場の近くのカウンター席だ。サラダとタコのマリネでビールを飲む。私たちが偶然入った店は地元の若者が仕事帰りに一杯やるたまり場であった。



ここでも夕方6時を過ぎるとスプリッツタイムだ。あんちゃんたちが、どんどん流れてきてちょこっと立ち寄っては、スプリッツと称するオレンジ色のカクテルを一杯飲んで、つまみのコロッケを口にほうりこむ。ガラスケースのうえにあるコロッケや一口サイズのピザ、カナッペ、カット野菜。こういったまかない食を彼らは立ったまま食べる。あとから知ったのだけど、立って食べる座るよりも格安なのだ。そうとは知らずに、私たちがテーブルに荷物をおいて腰かけたとき、ウェイターは「テーブルに座るのか?」と聞いた。そっだと答えると、わざわざ板の上に紙でできたクロスを敷いて即席のテーブルを作ってくれた。紙でできているがしっかりとし

たテーブルクロスだ。周りを見ても、ほとんどの客はテーブルクロスなんかなしで、立ったまま飲んで食べる。

イタリアは労働の国である。

彼らの体は力仕事で厳しく鍛えられ、均衡がとれている。労働とは汗して日銭を稼ぐものである。体に深く刻まれたゆるぎない因習にのっとって生きているように思える。朝早くから日暮れまできっちり働く。そして日が暮れたら、さっと用事をおいて、帰りはいつもの立ち飲みでスプリッツをひっかけて、いつもの仲間とちょっとおしゃべりしたら、あとは自分の時間である。翌朝カフェに立ち寄って腹ごしらえ。仕事に向かう。この単調な繰り返しが人生なのだ。この国では労働イコール生き



に仕事場に向かう。黙々と歩く
姿は颯爽として潔い。労働とは
身を呈して日銭を稼ぐこと。そ
の信念に誇りを感じさせる。



るということだ。迷いが無い。

ヴェネツィアからフィレンツェに移
動する朝、7時に予約した水上タク
シーは時間通りにホテルの玄関先に
艀をつけた。

サンタ・ルチア駅までの水路で、た
くさんの荷物船と行き違ったが、ど
の船も満載に食料や建材をのせてい
る。夜が明けきらない薄紫の水面
を、きびきびと荷を運んでいる。口
数は少ないが、狭い水路をすれ違い
ざまに、ちよつと頷いて会釈をかわ
す。どの荷役もダウンジャケットに
カーゴパンツであちこちに綻びが目
立つ薄手のジャージだ。

日が昇らぬうちからきびきびと仕事に
向かうのは男だけではない。女も足早







Venezia



Firenze

フィレンツェのAirbnbはサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の真ん前である。アルバイト事務1人が朝10時から夜8時まで交替で在駐している。近代的なカードキーで、入り口の分厚い鉄の扉もオートロックだ。私たちはイタリアに来て初めて鍵問題から解放されたのである。荷物を置くとアカデミア美術館に直行。12時に予約していたので列に並びずに入れた。続いてメディチ家宮



ヴェネツィアのサンタ・ルチア駅を8時に出てフィレンツェには10時過ぎに着いた。今日のItaloは時間に正確であった。

殿、メディチ家礼拝堂、メディチ家の墓へと歩く。たいした距離ではない。これらも待たずに入れた。

7 フィレンツェ1日目





アカデミア美術館

彫刻ではミケランジェロの「ダヴィデ」と未完の「パレスティーナのピエタ」、絵画では「海の聖母」「十字架降架」など。別室にはメディチ家の楽器の展示もあった。なぜ？楽器なの？というと、ヴァイオリン、チェロなどはメディチ家おかかえの楽士が奏でた歴史に残る名器ぞろいであるがピアノ。これはメディチ家がこの時期に開発したのだそう。



メディチ家礼拝堂

メディチ家礼拝堂は基本構想から完成までをミケランジェロに負う。サン・ロレンツォ教会と同じ敷地にあるが入り口は裏だ。私たちは正面のサン・ロレンツォ教会からメディチ家礼拝堂に入ろうとして、うろろしてポカをやった。中庭にある階段を上がると、ミケランジェロ設計のラウレンツィアーナ図書館に入ることができる。私たちは図書館は知らずに通りすぎた。メディチ家礼拝堂の裏手入口から奥へ奥へと狭い通路をたどって一番奥の地下にある小さな部屋がミケランジェロによる新聖具室だ。彼の彫刻がぎっしりと静謐な空間である。

スケベオヤジ

午後2時過ぎ。そこはメディチ家礼拝堂近くのカフェである。昼時で忙しいのに女性が2人で盛り盛っている。ガラスケース越しに大きなお椀に盛られた惣菜の中から1つなり2つなりを選ぶとプレートに少量ずつ取り分けてくれる。

インゲンとブロッコリーのサラダに米がふんだんに入っている。オリブオイルとシーズニングが効いていて冷えた米が酢でサッパリしている。



インチョウもびっくり。

「あっ！男が女の足をすりすりなどでしてる。あ、スカートの中に手を入れた。あっ！いま股の間に」

ほかに日本人客はいなかったの、おっちゃんとインチョウの過激な日本語は、まわりには理解できない。っていうかほとんどの客はテラス席でオヤジの痴態に気がつかない。

「カフェであんなことしていいの？」

あっ！ スケベオヤジが愛人を買っているではないか！

すーっと、おしゃれな着こなしの男が入ってきた。と、インチョウの隣のテーブルにひよいっと腰かけた。そこへ5分も待たずに女が入ってきた。飛びきりの美女。一目で高級コールドールとわかる。上から下までゴージャスな身なり。スケベオヤジはすっと立ち上がるや、おっちゃんの目の前で猛烈なデ IPPキスをしたらしい。

おっちゃんはややうく椅子から落ちこちるところだった。おっちゃんはいばらく口がきけない。

「の、の、のどの奥まで届くほど深いキスだ。あんなキス、お、お、俺うまれて初めてみた」

「俺あんな濃厚なキス見たことない」
おっちゃんとインチョウは目のやり場に困った。

そのときだ。





男が女のためにシフォンケーキを注文したらしい。黒人ウエイターがケーキを皿にのせて運ぼうとした瞬間「ちょっと待てっ！」女店主がウエイターをイキナリ押しとどめると、ケーキのテッペンにぶすりっとフォークを突き刺した。そしてクルリとオヤジに背を向けた。

黒人ウエイターはフォークがバースデーケーキの蝋燭みたいに思いきりよくケーキの真上に突っ立ったままオヤジの前に置いた。

インチョウはびっくり仰天。

（イタリアではケーキにフォークを突っ立てて客に出すのかしらん？）

女店主はもう一人の女店員に意味ありげに目配せをした。そしてスケベオヤジに勢いよく背を向けて、ふん！と鼻であしらい、無視を決めこんだ。

「おっちゃん。もう行こうよ！」

インチョウが立ち上がったのと、女店主がぶすりっとフォークをケーキに突き刺したのが同時であったから自然に彼女と目があつた。

インチョウと女店主の視線はすばやく交錯した。インチョウがうつすら眉をつりあげたのを彼女は見逃さなかった。

そのとき

（エロおやじ！）

（どスケベ！）

という世界共通の言語が私たちの瞳を行き交ったのである。

ハハハハハ…愉快だ。

ハハハハハ…おもしろい。

イタリア女ってサイコウ！

中央市場のナイトツアー

いったん部屋に戻って着替えるとナイトツアーだ。今夜は日本人ガイドのマキタさん。中央市場は一階が野菜、肉、魚、乳製品なんでもありの卸市場で、それらを2階で調理してくれる。観光客がめいめい好きなものを選んで調理してもらい、ずらっと並んだテーブルに広げて食べる。ピザマルゲリータが一番の売れ筋のようだ。

ピザは、パリパリの薄皮と、ほこほこ肉厚のもっちりした生地があつたが客はもっちりふくらを好むらしく長い列だ。途中で売り切れの札ができることもある。焼きあがると番号札で呼び出してくれる。



ス停でバスを待っていたとき、列に並ぶ一人の老女からアジ！と面と向かって罵られた。そのことが心にささってフランスが嫌いになったという。イタリアで初めて親日のヨーロッパに触れた。そしてそのままイタリアで暮らすこととなる。

アジア蔑視を決然とはねのける日本人もいるだろうが、居心地のいいイタリアに惚れ込む人もいる。マキタさんにはアジ！の一言が生涯のトラウマになった。

イタリア人は、ちよこっただけ下に出ると一所懸命やってくれるそう。な。これ大事だと思う。

アメリカ人みたく、すべて俺がタダシイと表面はうまくいっても心の奥で感情はざらつく。ちよっただけ相手を持ち上げるのがヨロシイ。そう

のを一皿、モツアレチーズのサラダを一皿、そしてピザマルゲリータを一皿頼む。3人でこの3品だ。ほかのテーブルを見るとピザ一枚、ステーキ一皿、肉の串焼き一本というように一人が一品で頼むようだ。ピザは一人でまるごと一枚食べる。いろんな種類を数名で分け合って食べているのは私たちだけだ。

マキタさんは50代後半。イタリアに30年暮らしている。日本の芸大を卒業してイギリスに風景画の勉強に行き、そこからオランダの歴史画へと興味が移り、ルネサンスのふくよかな肢体が好きになってフィレンツェへ。ボッティシエリの丸みのある肉体にひかれたそう。

マキタさんは、10代のころパリのバ



すると人懐っこく手伝ってくれる。
言葉もそうだ。おっちゃんが、たど
たどしいイタリア語でなんとか話を
する。英語をまじえずにとにかくイ
タリア語だけで話そうとする。する
と相手はじっと耳を傾けて理解しよ
うとしてくれる。

マキタさんは、老いた両親がいる東
京に年に一度帰って健康診断を受け
る。イタリアではかかりつけ医に診
てもらうシステムだが、よいかかり
つけ医を見つけるのが難しい。特殊
な診療に及ぶと、専門医への紹介や
予約などがやっかいだ。なので東京
で定期検診をする。
老いた両親に悪性の疾患が見つかっ
たりお兄さんが若くして亡くなった
りで悩むことが増えた。



アジ！と罵られた体験が強烈に尾を
引いて、イタリアの温かい懷に飛び
込んで30年だ。両親がなくなれば日
本で帰る場所は兄の息子がいる沖縄
だけ。独身のマキタさんにとって
フィレンツェに暮らす幸せは、きっ
とトクベツなものなんだ。

マキタさんによるとイタリアでは生
涯未婚率が高く、出生率も年々低下
している。少子高齢化は深刻だ。
2018年データで日本は高齢化率
27・5%で世界一位であるが、二位
はイタリアで23・3%。
2019年データで出生率は世界最
下位が韓国で1・05、イタリアは二
位の1・33だ。日本の1・43より出
生率は下回る。中高年のパラサイト
と晩婚化、生涯未婚率の上昇も日本

と共通する。イタリアでは失業率も
めっぽう高いそうだ。

8 フィレンツェ 2日目

二人ともボッティシエリめがけてダッシュした。でも3番だった。上には上がいる。世界レベルと競うのは容易ではない。

森閑とした部屋で、レオナルドとラファエロとボッティシエリの写真を撮りまくったあとで、ゆるゆるともと来た順路をたどって最初からじつくりと見る。

ふふふ…2回見るのだ。

ははは…至福の時間である。

やったあゝっ！

ハッハッハッ…

ホッホッホッ…

これ以上の満足はない。



ウフィッツィ美術館

フィレンツェ2日目はウフィッツィ美術館に行く。3か月前からネットで朝8時に予約した。私たちがほぼ一番乗りだ。10人ぐらゐの列で8時半に館に入る。ガラガラだ。

ここは、まっすぐレオナルド、ラファエロ、ボッティシエリに走るのがよい。せっかく一番で入館したんだ。入り口の祭壇画なんぞでうろろうしてはイケナイ。時間の無駄だ。誰もいない空間でレオナルドもボッティシエリもラファエロも完全に独り占めするのだ！それゝっ！行けゝっ！

私たちは走った。一番乗りを目指して走った。廊下を一直線に走った。

おっちゃんもぐっちょり満足。

8時半に入館して2巡目ともなると12時ぐらい。館内はもはやコミコミである。でも、ヴァチカン美術館ほどのコミコミではないので、絵画を見るには十分だ。

9時過ぎに私たちは一番端っこにあるトイレに行ってみたが、悠々と1人だけ。ハッハッハ気分爽快だ。

ところが12時ごろに再びトイレに行こうと見ると長蛇の列でとうてい入れない。



Le Gallerie degli Uffizi



Le Gallerie degli Uffizi



Cattedrale di Santa Maria Fiore

ジェロの『ピエタ』はじめ、かつて内外にあった彫像が収蔵されている。ここはすっかりスルーしてしまった。

ドゥオーモの隣にあるジョットの鐘楼は、ドゥオーモと同じぐらいの高さで400段あまり。チケットを予約していなかったので断念。大聖堂内のダンテの絵やヴァザーリの『最後の審判』などは間近に眺めることができた。

ドゥオーモの頂まで上るツアーにはニュージャージー、ジョージア、バートンなどアメリカ夫婦が5組。スペインから数組。日本人は私たちのほかに父娘1組、若い女性1名の5人だ。

「400段以上ある急峻な階段を上



サンタ・マリア・デル・ フィオーレ大聖堂

12時30分にサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、ドゥオーモのツアーだ。ガイドはフィレンツェ生まれのラウラさん。フィレンツェ大学で美術史を専攻したという。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂はドゥオーモ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂、ジョットの鐘楼の三つからなる。

サン・ジョバンニ洗礼堂の銅製の巨大な扉は天国の門と呼ばれる。その前で大勢が記念写真を撮っているがあれはレプリカでホンモノは館内にある。

大聖堂付属博物館には、ミケラン

ジョットの案内にある。おっちゃんもインチョウもかなりの覚悟だ。インチョウは何度もトイレをすませた。尿意を催してはまずい！準備万端。膀胱はカラッポ。

ガイドツアーは教会の入り口の長い行列をスキップ。ガイド専用の裏口から入る。薄暗い教会に入り、さあ、いよいよ今から最初の150段を上りますよ！

祭壇の後ろにある隠し扉を開けるとクーポラに上る細い階段があつて人ひとり通るのがやっとだ。私たちは一列に並んだ。その入り口でジョージアが脱落。

ええっ！まさか？！

上れないという。ジョージアは50代前半か。

「あなたは若い。階段は上れそうだ



けど…」とニュージャージーが励ますと、ジョージアは半ズボンを大きくまくって白いサポーターを見せて、ほら、こんなに痛むのだと大げさに顔をしかめている。

膝には伸縮性の白いサポーターをぐるぐる巻いているではないの。奥さんと二人で教会の外で待ちますと。

（えっ！なんのために大金払ってガイド雇ったわけ？）

おっちゃんもインチョウも啞然。

150段ほど上りドゥオーモの高い梁の上に突き出たクーポラの円周を囲む通路に出て教会内部を見下ろす。天井のフレスコ画の漆喰が手に届くほどに近い。円周の梁に飛び出した通路で、そこも人ひとり通るのがやっつとだ。

ニュージャージー夫婦がギブアップ宣言して引き返す。「ここで下ります」と手をふってバイバイ。また2人抜けた。

ニュージャージーがギブアップした時点で、おっちゃんとインチョウが最高齢となる。いや、もともと私たちが最高齢だったのかも？

最初にギブアップしたジョージアはフットボール選手みたいな巨体で100キロを越す。

二番目にギブアップしたニュージャージーも肥満体。あの体でどうやって狭いらせん階段をすれ違ふんだらう。アメリカはあきらめが早い。

クーポラの頂上からフィレンツェを一望できた。ガイドのラウラさんは力いっぱいクーポラってっぺんから見

下ろすフィレンツェ歴史地区の概要を説明している。けど、誰も聞いていない。みなテッペンに出たとたん自撮りに専念。
ついにテッペンに上ったのだ！
徹底的に証拠写真を残そう！

私たちのグループに1人だけ別格の美女がいた。20代。モデルか女優か？国籍不明。名前はミア。ツアーの面々は彼女がいたい何人なのか？はかりかねる様子だった。バリバリのミスコン肢体にパーフェクトなプラスチック顔。分厚いマスカラと濃いアイラインにアイシャドウ。原型をとどめない厚化粧だ。

ミアさんは周囲と一切しゃべらず携帯に向かって自撮りしている。ユー



チューバー？ いったいナニモノ？
尖塔のてっぺんまで登りきった。

いざ！と化粧を直し、つややかな長い髪を整え、にこやかにほほ笑む様子に「ありゃあ韓国女優さんだな」おっちゃんは断言する。

あっ！スマホに向かって何かしゃべっている。

あっ？ 日本語？

えっ？ 日本人？

ハハハ：久々にカッコイイ日本人を見た。

ミアさんは肢体の曲線と胸の谷間がくっきり露わなモスリンのワンピース。10センチのピンヒールで400段を一気に登ってYoutube!

ガイドの説明は完璧に無視。英語は話さない。ゼイゼイしているおっさんたちの前で優雅にカップ入りフ

ルーツを食べつつYoutubeだ。

『クープラでフルーツを食べるワタシ』

下りは登るよりさらに難儀だ。

下から登ってくる大勢とすれ違つにも狭い階段のどこかで待機して数名をやりすごし、また急いで下る。

次々に登ってくるので双方のタイミングが悪いと途中で複数の団体が立ち往生する。

突然。

「あのオーこの上まだどれぐらいありますう〜」へたりそうな関西弁が頭の上から降ってきた。おっ！と仰ぐと若い青年だ。

「もうすぐです。すぐですよ」とインチョウ。



Ponte Vecchio



ベッキオ橋

さて、次はピッティ宮殿とパラティーナ美術館。ここはベッキオ橋をわたってアルノ川の対岸にある。

ベッキオ橋の宝石店では、多くの観光客がちょよっとした宝石を買っただけだった。この（ちょよっとした）というのはトッテモ大事。ちょよこちよこつとした石のないピアスでも€1000〜2000だと思う。宝石なら小ぶりでも€10000は下らない。

私たちはどうした事か？ベッキオ橋のたもとにあるジェラート店でジェラートを食べてしまっ。しまった！一つ€10なんてあってはならない値段だ。

あとから考えたらジェラート€10はバカ高い。怒りのあまりジェラートの味がどうだったのかっ思い出せない。



Galleria Palatina

パラティーナ美術館

おっちゃんはカラヴァッジョの信奉者である。「ない!!カラヴァッジョの眠る天使の絵がない!どこにもない!!」と騒いだ。大騒ぎだよ。

インチョウはねちっこい性格である。「そんなはずないよ。売店に眠る天使のハガキがいっぱい売ってるし。絶対にどこかにある。見落としたんとちゃう?」インチョウはあきらめない。見つけるまでとことん探す。「あーあったあった。ほら。ここにありませ」

このように目的の絵を探すのも、まるで宝探しだ。有名作品のみを特別な扱いで展示していない。フツーにポンポン並べている。だからうっか

り見過ごすのだ。もとより全てが著明な作品なのだ。どこのどの絵がなんであるかを調べるのに皆さん苦労している。

パラティーナ美術館の出口近くから奥へと続くピッティ宮殿は、フィレンツェがイタリア王国の首都であった時代の王宮だ。



Firenze



途中で行列ができるサンドイッチ
ショップで買って帰る。ここは、に
いちゃん2人できりもりしている。
ビールとサンドイッチを買って部屋
で食べる。でもサンドイッチはスー
パーマーケットのほうかな？
インチョウは白米のおかゆだ。

9 ふたたびローマへ

フィレンツェからローマまで、Italoで2時間ほどだ。8時28分発でローマ着が10時すぎ。

隣席のイタリア人が驚くほど流暢な日本語で私たちに声をかけた。サビオさん。

彼はナポリ大学の外国語学部を卒業。専攻はアジアの言語でインド、インドネシア、日本、韓国、中国と
いろいろな言語のなかで日本語も半年ほど履修したという。

たった半年で平仮名、カタカナ、漢字の読み書きを覚えるのだ。卒業から20数年たっても日本語で私たちに話しかけることができる。今はナポ

リでクッキングスクールを経営している。Savios Kitchen。
ナポリのフィッシュマーケットと東京築地の雰囲気はとても似ているという。私たちは、ナポリのサビオスキッ
チンに必ず行こう！と心に決めた。

今朝は駅のカフェでカプチーノとクロワッサンとクッキーだ。

イタリアで最初に気がついたこと。駅のカフェはすべてオイシイ。初めは素通りしていたが次々と挑戦するうちに、混雑するレジでササッと注文するコツも覚えた。



Room91

ロープAirbnbにRoom91。

電話かメールで到着時刻を告げると家主が建物の玄関にやってきて鍵を受け取る。

マリオさん。30歳ぐらいの親切なおにちゃんだ。母親と2人でAirbnbを経営している。一つの階に4つ部屋があつていつも満室だ。

こんなにいい場所はめったにない。ヴァチカン市国が正面に見える。ヴァチカン美術館までゆつくり歩いても10分。走れば5分だ。地下鉄Ottavianoへ歩いて1分。地下鉄はテルミニ駅まで一直線で10分ほどだ。市電が真ん前を走っている。

部屋は明るく清潔でシャワーの給湯

もOkay.エスプレッソ・マシンまであつて、自室で入れたのコーヒーを飲むことができる。

**Airbnbの鍵を
どうやって受け取るか？**

部屋に入るためにはまず鍵を受け取る。私たちはRoom91が何階にあるのか？わからないためマリオさんに到着の電話を入れると玄関でマリオさんを待った。そのとき同じ建物に住む少年2人が帰ってきた。私たちは折よく少年たちが扉を開けたと同時に中に入れたので「この建物のどこかに宿はある？」と聞くと4階と答えた。

そのまゝ4階の上を「Guest house」と扉にある。あゝヨカタ。ここだ

ここだ！

ピンポンする女の人が「いゝ、Airbnbは3階ですよ」と愛想よく教えてくれた。

えっ？違うんだ。3階なのか…

そこで3階をピンポンすると、そこは若い家族で赤ん坊を抱いた父親が「いゝ。ここは間違ひです。4階だよ」

「Upstairs」を指した。

父親は赤ん坊に食べさせていたんだろっか？片手にナプキンをもって片手で赤ん坊を抱っこしている。申し訳ない。「Very sorry」というと、「No」と笑っている。穏やかな家族だ。

3階も違う。

4階も違った。

じゃあRoom91はどこにあるんだ？
途方にくれた私たちはマリオさんに



電話するが通じない。どうしたらいいんだろう…しばらくして、あやっ
と通じた。
マリオさんも、玄関で待っているはずの私たちが探してもいないじゃないか…と焦っている。Room91は
なんと一階だった。



Alindaは鍵の受け取りが一番のポイントだ。一面識もない相手とどこでどうやって鍵をもらうか？すれ違ったら鍵を受け取れない。ついで鍵の開け方だ。いったん部屋を出てしまったら、オートロックされた重い扉は二度と入れない。
Room91のセキュリティーは厳重で鍵は4か所にあった。
重くて古い木の扉に電磁ロックをはめこんである。ちょっとしたこつがあつて最初はうまくいかない。
「鍵が開きません」
私たちはマリオさんに何度も登場ねがう場面があつた。マリオさんは嫌な顔一つしないであつてくれた。
「I will be in one minute」
どうやらマリオさんと母親は同じ建物の上階に住んでいるようだ。

エアコンがよく効いていて快適。大通りに面していて目の前を路面電車とバスが頻繁に行き交うが、天井が高くて壁が分厚いせいか騒音はまるで気にならない。Ottavianoはまったくの庶民の街らしく€1のグッズや€5のドレスなんか露天でつるし売られている。しゃれた店構えでも値が張るブランドはなく€10〜30ぐらい。アラブ系の露天商だとアクセサリー3個が€1だ。





ローマの路上駐車

Room91から川向こうのボルゲーゼ公園までテヴェレ川ぞいに歩いて15分ぐらい。私たちはいったんスーツケースを置くottavianoからボルゲーゼ公園まで歩いてみた。

テヴェレ川ではボート競技の練習をしている。川をさかのぼってはまた下る、の繰り返し。河川敷ではサイクリングの家族連れが、おそろいのヘルメットで同じ道をなんども行ったり来たりしている。

日曜日は家族みなで集うのだろうか？路肩は駐車した車でぎっしりだ。ランチボックスをたくさんかえて公園に向かう。

インチョウは激しい路上駐車の流れに



驚いた。いまでもインチョウの目の前で何台もの車が止まったが早い、バギーと弁当を出して、ところかまわずに駐車するのだ。

橋の上にも駐車している。ひえっ？これって許されるのかなあ？橋に駐車してもいいの？ま、日曜日だから公園に行く家族かな？と考えたが、そんな甘いものではない。月曜日も火曜日も水曜日でも路上駐車はそのままだ。ローマ市内は、どこに行こうがドーンと路上駐車があつて、残りの車道をタクシーなんかガングラン飛ばすのだ。

インチョウは車の陰から飛び出したこどもが轢かれなのかしらん？とひやひやするが、タクシーは飛び出しなんぞまるで気にかけない。





Piazza del Popolo

ポポロ広場

ポポロ広場のサンタ・マリア・デル・ポロ教会には、カラヴァッジョの「聖パウロの回心」と「聖ペテロの逆さ磔」カラッチの「聖母被昇天」がある。礼拝堂はラファエロの設計。そのうえベルニーニの彫刻を2体も見ることができ。

カラヴァッジョの熱烈な信奉者のおっちゃんは大いに満足だ。

ポポロ広場はたくさんの人であつたが、カラバッチョの絵の周りには奥まっているせいか様子を知る人だけが集まっている。

そこからスペイン広場とトレビの泉を歩いてOttavianoに戻る。地元の



家族連れで賑わう通りをひとすじ奥まったパママシヨップNon Solo Pizzeria 昼食を食べる。

思いついてつけ足した。おじさんがそれを皿に取り分けているあいだに、一つ前に注文した家族が電話でなにかを追加してほしいと変更が入る。そこへ、いまの注文主から「じゃあ私もついでに、チキン丸焼き3つとミートボールと牛すね肉のスープもお願いね」という具合に勝手に追加を入れてくる。そして会計を終えようとするころ「いや待てよ、もう一つ入れてほしい」とか：てんではらばらだ。

これを間違えずにさばいていく。ピザ、ラザーニャ、肉団子、リゾット。私たちは、注文の列に並んだけど、なかなか順番が回ってこないうちに惣菜はバンバン空っぽになっていく。あ、狙っていた惣菜が売り切れた。「あ〜ついでに、そっちも5人分ね」



Non Solo Pizza

地元の人ががんがん買っていく。ビニールの手提げ袋をいくつもかかえてそそくさと店を出てくる。親族一同が日曜に集まったのだろうか？ 20個を超すプラスチックパックをミニバンにせっせと積んでいるおじさんもいる。店は狭いが内で食べることはできるし、路上に突き出したテーブルにもおばちゃん、子づれの若い夫婦、10代のにいちやんらが大勢腰かけている。いろいろな注文に、店のおじさんとおばさん二人で対応する。たとえば一つの家族がピザを数種類ばらばらな枚数で注文したとする。

「あ、ついでに、ブロッコリーと、肉団子と、パスタも」とレジの手前で



というように前の客が追加すると、私たちの分はおじやんだ。



飛ぶように目の前の皿が消えていくので私たちは焦った。

肉の煮込みだの一人の客が、10人分ぐらい持ち帰るのだからトレイがどんどんカラッポになるではないか。ようやく私たちの番が来る。

おっちゃんは気後れして「俺なんといって注文したら何が買えるのか？わからない」

えっ！やっと私たちの番が来たのに。



インチョウはズンズン前に出る。あれと、これと、それと、こっちも一個ね……すべて日本語で通じた。

ばあさん達もじっくり腰を落ち着けて食していた。鳥の丸焼きを一人が一つがつつり食べたあとで、べつとりデカイティラミスなんかをべちゃくちゃしゃべりながら食べている。イタリアばあさんを侮ってはならじ。彼女らの頑強な体躯を見よ！

その夜のこと。私たちが店の前を通ると、えっ！9時過ぎなのにまだやっている！

近所のにいちゃんが、外のテーブルでなにやらひそひそしゃべっており、最後の客と思える若者が腰をあげてようやく店はおしまい。

私たちは1リットルの水と瓶ビールを2本買った。



「栓抜きがないから瓶ビールは無理なんです。残念だけどビールは買えないわ」というと、どっかの引き出しをガチャガチャやって栓抜きを見つけると「これあげる。持っていきなさい」親切なおやじさんだ。「昼間食べにきたけど私たちを覚えていますか？」と聞くと、もちろん覚えていると。おやじさんは、たぐさんのトロフィーを店に飾っている。「あのトロフィーは料理コンテストで優勝したんでしょ？」とインチョウが聞くと「いや単に飾っているだけ。コレクターなんだ」正直なおじさんだね。ここは毎日来てもいいな。「明日もやってくる？」と聞くと、残念なことに月曜日は休みらしい。



目抜き通りをほんの一筋入るとパパママシヨップがある。地元の人が頼りにする味だ。昼は家族連れ。夜は若者。いつもいっぱいしている。私たちが店をでるころ、厨房で最後の片づけをしていた息子さんがちよこっと顔を出した。

ポポロ広場から戻って一息つくと、Room91に新規の客が来たばかりでマリオさんは忙しそうだ。私たちにエスプレッソ・マシンの使い方と家電のスイッチを説明すると、いつでも困ったら電話してねと告げてせかせかと出ていった。

私たちもチャオ!とあいさつするや地下鉄でバルベリーニ美術館に向かう。急ごう。

地下鉄でおっちゃんスリにあう

おっちゃんインチョウはOttavianoからBarberiniに向かう地下鉄のホームで列車を待っていた。

さーて列車が近づいた。ホームにいた客が順々に車両に乗り込む。ドアが閉まる直前のことだ。ダッッ…ものすごい速さでドアにかけより最後尾の乗客のうしろから数名の少女が飛び込んだ。ドアの近くに立っていたインチョウは、背中を妙なかげんで車内へと押し込まれたので振り向いてハッとした。(この子たちヘンだっ!!)

「スリだっ!」インチョウが叫ぼつとしたのと、隣の男性が「Pick pockets!」と小さく声に出したのが同時であった。インチョウも「Yes! Pick pockets!」



大声で叫んだ。少女の塊はドアが閉まる寸前に、するりと外に出るとばらばらにホームを走り去った。

(誰がスリにやられたんだろう?) インチョウは車内をそろそろと見渡したけれど、誰ひとり財布やバッグを確かめる様子はない。あのスリは失敗だったのか?

少女のくすんだ身なりやスカーフで顔を半分隠した表情、ドアが閉まる寸前に押し入ろうとするおかしい動き。(あれがスリ軍団なんだ)

地下鉄を降りて地上にあがる階段で「おっちゃん。いまのスリだったよ。きつと誰かスラレタんだよ」インチョウが振り向くと、おっちゃんは無言だ。「どうしたの? おっちゃん。どうかした?」

おっちゃんは下を向いたまま。階段を上って日なたに出た。ポツリと言
「俺、スリにやられた」

え〜っなんだって?!

「え〜っ！おっちゃん。何をスられたの？財布は？」

少女スリがおっちゃんのポケットに手を入れて財布をとろうとした瞬間、おっちゃんは偶然ポケットに手をつこんだんだそう。ほぼ同時ね。そのとき少女の手がおっちゃんの手とポケットの中で重なったのだそう。おっちゃんは少女スリの柔らかい手の感触が生々しく残っているらしく「俺トラウマ」

「あの感触は一生忘れられない」
固まったままずっと塩たれている。

「それでイッタイ何をスラレタのよ！」
財布が盗まれたのか？まずもってそ

れが気がかりだ。

幸いなことに財布は無事だった。

おっちゃんは恐怖が去らぬのか震えが止まらない。ず〜っと少女の手を話し続けるのである。

スリはいる。地下鉄だけではない。コミコミの美術館にも教会にもいる。インチヨウはスリが観光客のバッグに手を入れる瞬間を見たことがある。でも地下鉄の少女は一つの塊としてダ〜ッ！と駆け込んできた。そしてドアが閉まる寸前にパツと飛び出てホームを一気に走り去った。少女たちは組織して地下鉄を移動しながら稼いでいるのだろう。

インチヨウにはわかりやすい手法に思えた。押しの強い肢体に浅黒い褐色の肌、黒光りするぼさぼさの剛そ

うな髪は遠目からでも見分けるに容易だ。こういう状況なら対策は構じることができる。必ず防げるのだ。
「おっちゃん。あれならジューブン

対策できるよ。次は大丈夫だよ」
インチヨウはそう思うのだが、おっちゃんはひどいトラウマ。□数はとことん少ないのだ。



Palazzo Barberini

バルベリーニ宮殿
(国立古典絵画館)

ベルニーニとボツロミーニが建築を手がけた宮殿でバルベリーニ家から政府に譲られ美術館として公開されている。あ、美術館の回廊で猫を発見。ローマで猫を見たのは初めてだ。この猫たちかなりの有名人だ。バルベリーニ宮殿のブログにしばしば登場する。



カラヴァッジョの「ホロフェルネスの首を斬るユーディット」、「瞑想する聖フランチェスコ」、ラファエロの「フォルナリーナ」、「ユーディット」、フィリッポ・リッピの「聖母子」、「受胎告知」など。



Palazzo Doria Pamphili

建物の内装や調度が年代もので、よく見ると素晴らしいけど、こっちはテキトウに配置されていてなんとなく笑える。金持ちすぎてそこいらにほったらかし。
音声ガイドは無料で貸してくれる。
この英語ガイドがめちゃくちゃ愉快！猛烈に可笑的い。
カラヴァッジョ、ベラスケス、ラファエロ、ティツィアーノがズラリ。
カラヴァッジョ「エジプトへの逃避途上の休息」「懺悔するマグダラのマリア」におっちゃんはお機嫌である。
喫茶室の「カフェ・ドーリア」はスルーしてしまった！17世紀の宮殿で優雅にお茶できたのに残念。



ドーリア・パンフィーリ美術館

スペイン階段といったのはショッピングでにぎわう界隈だ。コンドッティ通りとコルソ通りの一隅にドーリア・パンフィーリ美術館がある。
繁華街にあるが扉を一步入ると通りの喧噪はまったく聞こえない。静かだ。回廊に囲まれた中庭から美術館の入り口までドーリア家が所有する車が無造作に停められている。ずらりと並ぶ高級車だ。

美術館はドーリア・パンフィーリ個人のコレクションで廊下といわず部屋といわずあちこちに陳列されている。無造作に放置と言ってよい。





帰りは地下鉄はやめてタクシーにする。
 おっちゃんらは地下鉄が恐怖だ。
 インチヨウはスリ軍団の手の内は読めた。
 「よーし！今度は迎え撃つてやる！」
 なんてでも地下鉄に乗って対決するつもりだ。
 この次は絶対にうちのめしてやる。

10 Orvieto

Orvieto

ローマにもどって2日目はOrvietoに向かう。チヴィタ・ディ・バニョレージョを訪ねるのだ。

チヴィタ・ディ・バニョレージョはそりたつ断崖絶壁の頂に超然と孤立した村である。La città che muore「死にゆく町」の異名をもつ。アニメ「天空の城ラピュタ」のモデルとしても知られる。



ローカル線の乗り場はEST間違えないように...

朝からテルミニ駅に向かう。ウンブリア州Orvietoまではローマから準急で1時間15分。運賃は€7.8だ。準急は2時間に1本。準急よりも10分ほど早い全席指定のインターシティーもあるが値段は準急のきっかり2倍だ。値段はさておき、私たちがテルミニ駅に着いた8時の時点で直近の9時発に乗るしかない。次の列車は11時半発なのだから。

ローカル線を発券機で買うのは、慣れないうちはチョット手ごわい。

インチョウは切符売り場に並んだ。券売のお姉さんから切符を受け取る時「何時に発車しますか?」とインチョウが聞くと「9時!」猛烈にきっぱりした答えが返ってきた。はい、そりゃあそうですね。

(アンタ!切符買う前に時刻表も調べないの?)

インチョウはねちっこい性格である。

「何番ホームですか?」

「EST!」お姉さまはきつぷり。

(当たり前のことを聞くな!)

そんなもんインチョウはひるむまい。

「EST」はフツウの1番ホームとは違ってますか?と聞く。

すると、お姉さまはクジラのような丸い体をカウンターに乗り上げる勢いで「No! No! EST!」とESTを強調しつつ、せいっっぱい腕を伸ばして





遠くの方角を指さした。
あとからわかったのだがESTはItaloやTrenitaliaなどの特急の乗り場とは全く別。ゼンゼンベツ。在来線の乗り場から一駅ほど離れた場所にある。
そんなことはつゆ知らず、私たちは在来線一番乗り場でぼけーっと待っていた。しかし電光掲示板にOrvietoのdestinationがいつまで待っても掲示されないのだ。

(どうもおかしいな。乗り場が間違っている?)
おっちゃんとインチョウは急ぎ足でESTをめざして歩く。
これって間に合うんだるか?

ESTはとんでもない場所にあるのかも?と思いがおよんだ。
行けども行けどもESTはない。

ひょいと後ろを見たらアメリカ青年も真剣に走っている。
ローカル線だけの乗り場が

ESTだ。

クジラお姉さまはインチョウが間違わないよう、まあいい体を券売力ウインターに乗りあげてESTの方向を指さしたんだ。なんとこの親切なクジラお姉さま。あー危なかった!

列車に飛び乗る。すでに列車は満席だ。アメリカ青年もつづいて飛び乗った。あー間にあった!

「トスカーナ行きはこっちであっているのか?」と心配顔の若いアメリカ人が駆け寄ってきてインチョウに尋ねる。「私たちはウンブリア方面だからトスカーナに行くかどうかかわからない」と答える。インチョウも自信はない。彼も「あーウンブリアー」とか返事したけど、私たちが小走りに急ぐので、彼も走ってついてくるではないか。
走っているうちに、ひょっとして



よし！次はローカル線だ

旅行者でぎっしりのローカル線を見てわかったーそういうことか。

Italoなどの特急列車は料金が高い。

しかし、たいして早くない。

じっくり時刻表を調べると準急も特急も目的地によっては到着時刻があんまり変わらないことに気づく。

となると料金が激しく安いローカル線でフィレンツェやラミラノやらに行く旅慣れた旅行者がすっかり乗っている。彼らは途中下車しつつ田舎をあちこちまわるようだ。

€10か€20そこらでミラノやフィレンツェやヴェネツィアに行けるのだ。山岳方面にハイキングに行くのだろうか？デカいスーツケースの上に登山用

の大きなリュックを積み上げている。私たちもイタリアの地方をローカル線で回ろうか？こういう旅ってちょっといいかもね。

よし！次はローカル線だ。

Civita di Bagnoregio

Orvieto駅からチヴィタ・ディ・バニョレージョに行くバスは一日3本だ。片道1時間弱で運賃は€2.5。

私たちが10時過ぎにOrvietoに着いたときには12時30分までバスはなし。ひえーっ！バスがないっ？！

チヴィタ・ディ・バニョレージョに行く旅行者は、ほとんどがパッケージツアーだ。たいいていフィレンツェかローマからアッシジやシエナを廻るついでに大型バスで立ち寄る。

私たちのような単独の旅行者は、レンタカーがなければ断崖絶壁のチヴィタ・ディ・バニョレージョへは行けない。

インチョウはOrvieto駅を降りるや一散に走って一番先に改札口を走り出した。そしてタクシーめがけて走った。まっしぐら！駅前にとまっていたタクシーに、イキナリ胸から上半分を突っ込むと運転手のあんちゃんニコラに「チヴィタ・ディ・バニョレージョまでいくらかかるか？」値段交渉だ。タクシーはその一台しかない。絶対にニコラを逃してはならぬ！

往復€70で交渉は成立。ニコラは山頂で1時間だけ待っていてくれるという。おっちゃんとインチョウはニコラの運転で天空の城に向かう。



バスなら1時間ちょっとなのに私たちは20分もかからずに着いた。もしかして15分かも。理由は簡単。運転手のニコラが120キロ超のスピードでぶっとばしたからである。曲がりくねった山道であれ、村落のなかの狭い路地であれスピードを落とす気配はまったくない。ずーっと150キロ。さすがにフェラーリの国やね。

ニコラは英語を話さない。一言も口

もきかずに前を向いてアクセルをふかし続けた。

イタリアの山岳地帯はかなりの過疎である。ローカル線で旅すると人口が大都市に偏在していることがわかる。チヴィタ・デイ・バニョレージョの人口はたった6人らしい。でも最近では Airbnb ができて観光シーズンには滞在客もちらほらいるという。

チヴィタ・ディ・バニョレー ジヨの猫たち

チヴィタ・ディ・バニョレージヨにはたくさん猫がいた。

そういえばローマではノラ猫をついぞ見かけなかった。20数年前に訪れたときは、コロッセオにたくさん猫が寝そべっていたが、あの猫たちはどこに消えちゃったのだろう？

ローマのトッレ・アルジェンティーナ広場の遺跡の地下に猫のシェルターがあって数百匹の捨て猫が保護されているという。なんだ：だからローマ市街で猫を見かけないのだな。

インチョウの胸の奥には3年前に死



に、もう一度会いたい。たまちゃんと話したい。

亡くなった両親はお墓のなかで安らかに眠ってもらいたい。お墓から出てきてもう一度会いたいなどは決して思わないのである。が、たまちゃんには会いたい。もう一度会って話したい。

おっちゃんは「不謹慎だ」というけれど本心である。

母は76歳、父は89歳で亡くなったけれど、二人ともやりたいことは十分



んでしまった、たまちゃんがいる。悪性リンパ腫で抗がん剤の治療もむなしく11歳でこの世を去った。悲しい。とても悲しい。本当に悲しい。心の底から悲しい。無念だ。

もし思いがかなうのならたまちゃん

果たした。幸せな人生だったと思う。でもたまちゃんは違う。悪性リンパ腫で辛い目をしてかわいそうであった。こんど、たまちゃんに会ったら、うんと幸せにしたい。





Orvieto市街

オルヴィエートはエトルリア時代の街だ。やっぱり高い崖の上にある。チヴィタ・ディ・バニョレージョから戻ると、私たちはOsteria駅前のケーブルカーで山頂に上った。

オルヴィエート大聖堂は、小さな街には不釣り合いほど大きくて豪華だ。とがった屋根のゴシック建築で、正面はきらびやかなモザイクで飾られている。聖堂にはルカ・シニョレッリの『最後の審判』『善人と悪人の識別』などが端々にいたるまで極めて精密に描かれている。フィレンツェ、ヴェネツィア、ローマの大聖堂のどのフレスコ画ともまったく異なる筆致だ。

Orvieto



街の端っこにエトルリア時代のネクロポリやカーヴアの井戸などがあって崖壁にそって急な階段を下ると、暗く深い地下の遺跡も見学できるそう。

昼食は猪っていうか野生のブタ肉を炒めたのと、キノコのウンブリアパスタ。どちらも地元食材をパスタに混ぜこんだ田舎料理だ。

街は周遊できるように標識がそこかしこにあるが観光客はさほど多くない。人々の暮らしがしっかりとある。学校、市役所、美容室、八百屋、手芸店、日用雑貨、ヨガ教室なんかの中世の外壁のそこかしこに彫り込まれている。

Piazza della Repubblica

その先を歩くとサンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会だ。外見はシンプルなバロックだが一歩中に入ると大理石の装飾が重厚である。祭壇の左にベルニーニの「聖テレジアの法悦」翼廊にはドメニコ・グイディの「聖ヨセフの夢」とグエルチーノやドメニキーノの絵がある。



共和国広場

ローマのテルミニ駅に戻ったのが午後4時過ぎだったか、ひよっとして5時ごろだったか。6時過ぎまで駅周辺の教会と遺跡を歩き回る。

テルミニ駅のすぐ近くに共和国広場の噴水がある。ロータリーが広々と見渡せるその脇にディオクレティアヌス帝の浴場跡があり建物の一部はサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会だ。遺跡の教会だけに外観はまるで廃墟のようだが内部は思いがけず大きな空間だ。



マッシモ宮殿は、まるで宮殿の外観ではないが、その実ローマ国立博物館で古代の発掘物が展示されている。テルミニ駅周辺はスリが多くて治安が悪いとされているがインチョウは好きだな…この雰囲気。バーンと目の前に迫ってくるデカい遺跡なんてまーったく意に介せず人々がせわしなく行き交う光景はローマらしくいい。

Basilica di San Pietro

11 ローマ最終日

サン・ピエトロ大聖堂

私たちはイタリア最終日に再びヴァチカンを訪れた。今日こそはゼッタ

30人ほどの列に並んだけれど、ともかくも最初のグループで入館できた。エレベーターで尖塔まで上ると、その上は狭いらせん階段だ。そこからサン・ピエトロ大聖堂のクーポラの最上階へ一番でのぼることができた。

午前7時ちょうどサン・ピエトロ大聖堂の入り口に並ぶ。

セキュリティチェックで私たちの前に20〜30人の列はすでにあっただし、

おっちゃんとインチョウはクーポラのでっぺんで朝焼けのローマを撮りまくった。

クーポラに上るチケット売り場でも

ちなみにクーポラから下りは別の階段である。上りと下りが別でヨカッタ。フィレンツェでは、ド

ウォーモの上下の階段が同じであったから狭いらせん階段でやりかわすことになって、たいへんな思いを

したが、これなら楽だ。

尖塔を降りてサン・ピエトロ大聖堂に入る。時刻はすでに9時過ぎであるから、さすがに200人ぐらいはいたがコミコミではない。

サン・ピエトロ広場はベルニーニが設計。大聖堂のクーポラはミケランジェロである。広場の中央にはオベリスク、その両端に噴水、そして広場をぐるりと取り囲む円廊の柱廊の頂から140体の聖人像が見下している。





サン・ピエトロ大聖堂から戻ると、近所のB&Bでコーヒーを飲む。サラリーマンが仕事帰りにちよこっ

と立ち寄って小さな菓子袋をさげて出ていくのを何度か見かけたので、インチョウは前から目をつけていた。たぶんここならオイシイはず。サンドイッチと菓子をたのむ。

カプチーノ・カフェ

みんな立って食べる。こどもだって立って食べる。コーヒーの種類はいろいろあるけど、私たちはいつもユーロのエスプレッソに砂糖を入れてくいと飲む。焼きたてブリオッシュはふんわり甘くておいしい。

近所のB&Bのパンとコーヒーがおいしいことは、その場所で暮らす幸福のカチ。そこで生きるキホンだと思いつ。ブリオッシュのほかにカスタードクリームやジャムの入ったクロワッサ

ンが人気だ。苦いコーヒーがいい。エスプレッソとカプチーノほかにエスプレッソに少しミルクが入ったカッフェ・マッキアート、コーヒー牛乳みたいなカッフェ・ラッテ、泡立てたミルクがたっぷりにコーヒーが少しのラッテ・マッキアート、エスプレッソにグラッパみたいに強いアルコールを少ししたカッフェ・コレットなどがある。隣の席を見たら、めいめいがまるで違うものを注文している。それぞれお気に入りがあるのだから。

今日はローマ最終日であるから土産を買う。チョコレートだ。こまごまとした可愛らしい店Castroniもよく近くだ。



12 おわりに

やっぱり、しばらくの間住むとしたらローマかな。

「おっちゃん。私たちローマに住もうか？」

「うん。ローマがいい」おっちゃんもローマが気に入った。

なにより私たちは、この場所が好きになった。Ottavianoは庶民の街だ。

とってもいいカフェがある。毎朝カプチーノでブリオッシュをかじる。昼もサンドイッチだ。立って食べる。

Non Solo Pizzaはインゲンのサラダとリゾットが美味しい。おじさんとおばさんは親切だ。角をまがればExpress。レジのおばちゃんはテキパキしている。どんな混雑でも勘定

を間違えない。惣菜売り場のおっちゃんも優しい。あれやこれやと迷うこちらの注文を辛坊づよくじつと聞いていて、惣菜を受け取るたびにグラッ

ツエといってうつむきがちにニッコリ目配せする。

マリオさんはアニメオタクで日本好き。部屋は掃除がきちんとしていて清潔だ。めっぽう営業努力している。いい人たちだ。

美術館のどれもが一度ならず二度でも三度でも訪れたいと思う。

来年も再来年も来るたびに違った何かを発見できると思う。一回ではま

るで歯が立たない。当然だ。二回目

もおそらくそうだろう。でも何度か訪れるうちに、ずしりと響くものがある、それが何かわからなくてもいい、言葉にできなくてもかまわない。それがローマだ。それを一度に味わわずに、少しずつ何年もかけてゆっくり味わいたいと思う。

おっちゃんは、早速フライトを検索している。ローマ行きチケットをあちこち比較して、いきついたのがオランダ航空、アムステルダム経由ローマ行き。私たちは2019年12月31日から再びローマに行く。

「ねえ、おっちゃん。なんでローマなんだろ？なんでヴェネツィアではダメなんだろ？なんでフィレンツェ

ではダメなんだろ？」

その答えは簡単には見つからないと思う。



13 番外編

ローマの歩き方

おっちゃんと言チヨウは2019年の暮れふたたびローマを訪れた。12月31日から1月5日までどっぶり5泊マリオさんの部屋だ。

12月31日夕刻。ローマのフィウミチーノ空港に着くとマリオさんが予約してくれたメルセデスが待っていた。道路はすいていたので30分ほどOttavianoに着いた。Room91の入り口で

「鍵を新しいのと換えたから開けやすくなったよ」

ほら：と、マリオさんは部屋の鍵をさしだした。

10月に私たちが滞在したあと、彼は別の場所にもAlfonsoを始めた。

「へえ、っ大成功してるんだネ！」



で見送ると一人ひとりにチャオ！と抱擁してバイバイ。

毎年変わらない光景だろうか。しごくあつさりしている。でもとてもイイ。どのテーブルもパスタとピザだけだ。ワインとビールで簡単に食べて、わーいわたくさん話をして早々に店を出るのだ。

私たちもリゾットとスパゲッティ。それにワインとビールだ。

「大晦日と元旦はほとんどの商店が

「マリオさんもうかってるんだね」マリオさんの事業は順調らしい。

荷物を部屋に置くと夜8時ちょっと過ぎ。Ottaviano界隈のレストランは大晦日でにぎわっている。家族が大勢で一つのテーブルをぎゅうしりと囲んでいる。小さなこどもたちもちょっぴりおめかしして、おとなしく席についている。料理はパスタとピザだ。2つか3つの大皿に、てくんこ盛りのパスタと大きなピザ。あとは魚かチキンのフライを皿にどっさり盛って、めいめい取り分ける。わいわい、いーっぱい話をして、デザートにケーキを食べる。飾りのないチョコケーキだ。そして、さほどゆっくりもせずに出ていく「よいお年を」

店長とスタッフに一人ずつ挨拶してわかる。店長もスタッフも出口ま

閉まるから飲料水の確保をしておくように」

日本を発つ前に聞いていたが、まったくの杞憂であった。



大晦日の深夜でもアラブ人が営むよろずやは開いている。間口が狭く薄暗いが、水だけではない。たいいていのものはそろっ。



1月1日

おっちゃんとインチョウは早朝から教会をまわる。

深閑と寝静まった街は暗がりで見渡すも、ミサに訪れる人影はまばらである。わあーっ！これなら思い通りに写真が撮れるゾ。

サン・ピエトロ寺院の真ん前を貫く広い石畳に立って、さてとっ！カメラを手にしてサン・ピエトロ広場と大聖堂を一直線にふりかえたとき。

そのとき初めて気がつくのだ。
(ああ…そうなのだ)

広場、橋、教会。そうだった石がローマのランドスケープだ。そうか石なんだ。いま古代都市ローマを浮き彫りにしている。

人影のない夜明けの街で、遠くの遠くの空のはてまで一直線に見渡したとき気がついた。ローマとは広場なのだ。教会なのだ。橋なのだ。そして足元につながるこの石畳なのだ。そうか…ローマってこの石畳なのだ。いにしえから今に通じるこの石なのだ。黒々とどこまでも続く一条の道がローマだ。





パンテオン



サンタンジェロ城

ナヴォーナ広場



広場はいたるところにある。いま歩いたサン・ピエトロ広場、ナヴォーナ広場、カンポ・デ・フィオーリ・ファルネーゼ広場、ヴェネチア広場そしてポポロ広場。
広場の多くは教会やファルネーゼ、スパーダ、パンテオン、ヴェネツィア宮などの宮殿の前にあつて大勢の人が集まる。広場は重要だ。古からまつりごとの場所なのだ。

薄紫の朝靄のなかをサンタンジェロ城を過ぎサンタンジェロ橋を渡ってナヴォーナ広場まで歩く。
サンタンジェロでシャッターをきる。ははは…思わず笑いがこみあげる。これって古代ローマそのままだろうか…
すれ違いざまに数人と目が合った。彼らもカメラを構えている。
こちらに向かって小さく会釈を投げた。





ヴェネツィア広場



エマヌエーレ2世記念堂



パンテオン



ナヴォーナ広場



そこからヴェネツィア広場に出てジェズ教会だ。ヴェネツィア広場では騎馬兵の行進があった。ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂広場を騎馬隊が肅々と進む。

ジェズ教会



ナヴォーナ広場の噴水の前を過ぎるとパンテオン。サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会からアルテンプス宮、カンポフィオーリ広場を通り、ファルネーゼ広場、スパーダ宮殿、ファルネーゼ宮殿をへて、再びナヴォーナ広場にもどる。



カラヴァッジョ

10分あまり歩くとポポロ広場に出る。ここには3つの教会がある。ポポロ広場の双子の教会サンタ・マリア・イン・モンテサントとサンタ・マリア・デイ・ミラコリ教会。そしてカラヴァッジョの絵とベルニーニの彫像があるサンタ・マリア・デル・ポポロ教会。そこからテヴェレ川に沿って Ottavianoに戻る。



サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会

サン・ルイジ・フランチェージ教会でカラヴァッジョを見る。その2ブロック先にサントアゴラティーノ教会。ここにはラファエロとカラヴァッジョの絵がある。その隣はローマ最古の図書館アンジェリカだ。

サントアゴラティーノ教会



ポポロ広場



になる。外のベンチにも順を待つ人ばかりがあつて、ベンチのそばに頼りないストーブが一つぽつんと置かれていた。

どの家族もさほど長居せず。なので回転は速いのだ。

若い父親がタッパーをバギーの下段に持ち込んでいる。こどもが食べ残した菓子やパスタをせっせとより分けてアルミホイルに包むと次々にタッパーにつめて大小きちんとバギーの底に並べているではないか。なんともまめな父親だ。遊びたがる小さなこどもたちにも、辛抱強くスプーンで口に運んでやる。

ふくむ。ざっと見渡しても、どのテーブルも女が強い。しきっているのは女たちだ。



お昼はマリオさんが予約してくれたレストラン 'Isola della PIZZA' のランチ。近くの家族づれが大勢でにぎやかにテーブルを囲んでいる。

入れ代わり立ち代わりおなじみさんがやってくる。新しく客が来ると、いくつかのテーブルをちょよっと組み合わせて、どこにでも即席で割り込ませる。いっぺんにこれだけの人数をつめこむなんて！ すごい早業だ。レストランってイタリア文化の真骨頂だ。これだけたくさんのお客様を狭いテーブルに押し込むのも、厨房で大忙しで調理するのも、一朝夕ではかなわぬ芸術だ。

私たちはマリオさんが彼の名前デルモンテで予約してくれたおかげで、よい席を配されたけれど、もし予約がなければ外のベンチで食べること





共和国広場

ディオクレティアヌス
帝浴場遺跡



1月1日午後

Ottavianoから地下鉄Termini駅
にむかう。

Termini駅周囲の遺跡ディオクレティア
ヌス帝の浴場遺跡から、共和国広
場の噴水を通り、サンタ・マリア・
デリ・アンジェリ教会と、サンタ・
マリア・デッラ・ヴィットリア教会
を見てそこから駅の反対側へと移動。
目の前にそびえるのはサンタ・マリ
ア・マッジョーレ教会。
ローマ四大聖堂の一つだ。



サンタ・マリア・デリ・アンジェリ教会

サンタ・マリア・マッジョーレ教会



サンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会

路地裏にはBBQ、アラブ人の露店や
スーパールがある。インチョウはこう
いう下町が好きなのだ。地下鉄で
Termini駅からOttavianoに戻る。
へるへるだ…チキンラーメンを食べ
て寝る。





1月のローマは真冬だというのに、
日差しがぽかぽかと心地よい。街歩
きは快適だ。最低気温が1〜3度、
最高気温は10〜15度なので寒いと想
像されるが、まるで違った。

テルミニ駅



太陽が頭上に近く感じられる。冬は
雨が少ないことも幸いしている。歩
き続けているせいか汗ばむほどだ。



サンタ・マリア・マッジョーレ教会





Non Solo Pizzaで昼ごはん。
Non Solo Pizzaのおやじさんは、私
たちのことを覚えていた。
「私たち10月にも来ましたよ」と、
おっちゃんの声かけると、おやじ
さんは店の奥からこっくり頷いた。
肉とグリーンピースの煮込み、ほうれん
そうとインゲンとブロッコリーのサラ
ダ、牛すね肉のシチューとリゾット、
ビール2本でも30。
肉の煮込みとシチューにパンが2塊
ついてくる。
パンを野菜と肉汁にひたして食べる
のだ。隣の席で道路工事のおじさん
2人が早めの昼ごはん。みなさんガッ
ツリ働いている。



1月2日

7時30分。サン・ピエトロ大聖堂は
ひとけがなく閑散としている。新年
のミサだろうか各国からの信徒が祭
壇にあがっていく。

つぎはヴァチカン美術館へ。

ヴァチカン美術館の公式サイトから
9時の予約を入れたのでバウチャー
を見せるとすんなり入れた。館内は
すいている。

パッケージツアーの団体が少ないの
で移動が楽だ。たつぷりと見る。11
時30分ごろ美術館を出て近所のカル
フルで野菜と果物を買う。

オレンジ12個とトマト8個と牛乳と
缶ビール2つでも10ちよっと。



サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会



トラステヴェレはまったくの若者の街だ。狭い石畳には、おしゃれなレストランやカフェがいっぱい。帰りのバス停は中洲を渡った橋の向こうだ。中洲はティベリーナ島。その昔ペスト患者の治療に使われたらしい。中洲には教会と病院があった。ファデー・ベーン・フラッテリ病院とサン・バルトロメオ・アリーゾラ教会だ。



ファルネジーナ荘

トラステヴェレに向かう。テヴェレ川を渡った向こうの岸辺までバスだ。ラファエロの壁画と天井画で有名なファルネジーナ荘。その向いはコルシーニ宮殿。

1月2日午後



そこからトラステヴェレ界隈のにぎやかなレストラン街を歩いてローマで最も古い教会サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会に歩く。





中州の前からトレヴィ行きのバスに乗る。トレヴィ地区へと移動する車窓から、カンピドリオ広場、サンタ・マリア・アラチェリ教会、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂前を走って、ヴェネツィア広場を抜けて、コロンナ宮の真ん前の繁華街を走る。バスはドーリアパンフィーリ美術館の前で停車した。

「あっ！美術館が開いている！」
「えっ！昨日は閉まっていたのに」
「よしっ！下りよう！」

美術館の門が開いているのを偶然目にした私たちはバスから飛び降りてドーリアパンフィーリ美術館に入る。隅から隅まで丹念に眺めると、さすがにすごい美術品ばかり。

ここは2回目だ。どのへんに何があるのかだいたい把握できていたので



冷静に動くことができた。
ああ！やっぱりここはスゴイ！
ドーリア家は成熟した審美眼だ。完璧にオタクと呼ぼう。
彼らのコレクションには独特のセンスがある。

€2追加を払ってドーリア家の邸宅も見学する。

ここはしょぼい。しょぼすぎる。

えっ？なに？どうしたの？このしょぼさ…なんで大金持ちの邸宅がこの程度に悪趣味なんだか？ちょっとワカライナイ。無料の音声ガイドはは何度聞いても愉快。

これ。美術品の説明ではない。もっぱら両親や曾祖父がどうしたこうした。母親が離婚したのだ、叔母が若くして未亡人になったのだ、雪の重みで天井が抜けて屋根が落ちたとか、ときの修復がたいへんだったとか。ドーリア家の当主自らが一族の出来事を語るのだ。彼はとてもお茶目。





コロナナ広場
マルクス・アウレリウス記念柱
内閣総理府=パラッツォキージ

ドーリア邸の近くにコロナナ宮があつて首相官邸に近い。午後8時だ。スペイン広場につながるコルス通りは大勢の家族連れでごったがえしている。すごくい熱気でチットモ前に進めない。この混雑ってどうよ？ まったく前が見えないのよ。人垣をかき分けすり抜け、ようやくスペイン広場に出てSpagna駅から地下鉄でOttavianoに戻る。足が痛い。ヘロヘロだ。風呂に入りたいなあ…バスタブがあればなあ…おかゆを食べてすぐに寝る。

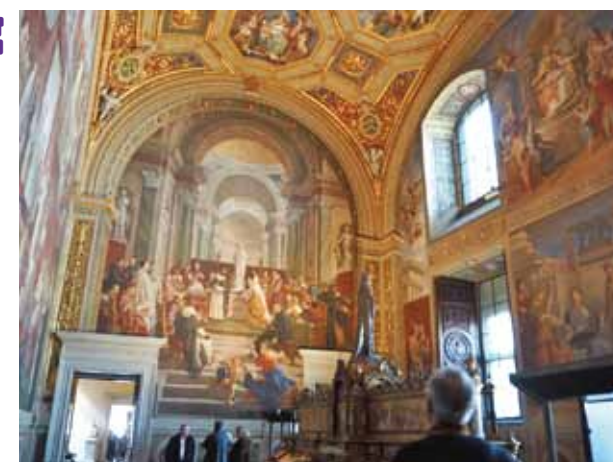


ラファエロ「キリストの変容」



地図のギャラリー

ヴァチカン美術館



レメンティーノ美術館、ピナコテ
カ、ピオ・クリスティアーノ美術館、
もう一度システリーナ礼拝堂に戻っ
て、そこからエジプト博物館。

2日にわたり絵画館、エジプト館、
古代博物館などたっぷり見た。見た
ぞ見た見た。さすがにうんざりだ。
「もうヴァチカン美術館は飽きたな」
「おっちゃん！早く出ようよ！」
ねちっこくて飽きっぽい性格のイン
チウはつぶやく。
10月に来たときは殺人的混雑だった
のに、これってどうよ？ガラガラ
じゃん。まるでひと気がない。



カラヴァッジョ「キリスト降架」

最初にシステリーナ礼拝堂に入り、
そこからラファエロのアテネの学
堂、ラファエロの間に戻り、八角の
庭にあるラオコーン、地図のギャラ
リー、タペストリーのギャラリー、
続いてエトルスコ美術館、ピオ・ク
それっ！走れっ！
最初にシステリーナ礼拝堂に入り、
そこからラファエロのアテネの学
堂、ラファエロの間に戻り、八角の
庭にあるラオコーン、地図のギャラ
リー、タペストリーのギャラリー、
続いてエトルスコ美術館、ピオ・ク

1月3日

ヴァチカン美術館

公式サイトから2日連続で予約した。

1月2日は9時。1月3日は7時15
分朝食つき。この日は2回目だ。

なんとっ！あまりにもまずい朝食だ。

学食よりもひどい。ティーバッグの

紅茶はお湯を注ぐ。セルフサービス

だ。すぐに美術館へ直行！せっかく

7時15分に入館できたのだ。

それっ！走れっ！

最初にシステリーナ礼拝堂に入り、

そこからラファエロのアテネの学

堂、ラファエロの間に戻り、八角の

庭にあるラオコーン、地図のギャラ

リー、タペストリーのギャラリー、

続いてエトルスコ美術館、ピオ・ク



サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ教会

1月3日午後

地下鉄AからBに乗り換えて、サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ教会に行く。地下鉄Bバジリカ・サンパオロ駅から歩いて7〜8分だ。小児専門病院の隣にある。

技場跡で、その近くに広々としたカラカ浴場跡がある。さらにバックしてカヴール駅で下車。カヴールの急な石段を上るとサンピエトロ・イン・ヴィンコリ教会だ。サンピエトロ・イン・ヴィンコリ教会はミケランジェロの彫像モーゼとふたりの奴隷が有名。さらに一駅バックしてテルミニ駅で下車。



駅前のマッシモ宮国立博物館に入る。
 インチョウはこの国立博物館がトッ
 テモ気に入ってる。発掘された彫像
 やフレスコの壁画などがギッシリ。
 広くて静かでゆっくり鑑賞できる。
 さてとサンタ・プルデンツィアーナ
 教会まで歩く。ここはサンタ・マリ
 ア・マッジョーレ教会の坂を下って
 すぐだ。



サンピエトロ・イン・ヴィンコリ教会



チルコ・マッシモ



マッシモ宮国立博物館



ギネスパブ



おっとその前に
 Republica近くのパブでギネスを
 2パイント。モッツアレラチーズと
 カルボナーラパスタを頼む。
 部屋に戻っておかゆ。お湯を注ぐと
 できあがり。へろへろで寝る。
 (毎晩、おかゆ、チキンラーメン、
 まるちゃん緑のためぎと赤いきつね)
 これってどうなんよ?



サンカルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ教会

そこからベルニーニの彫像があるサンカルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ教会へと歩く。
 教会の壁に彫り込まれた彫像と四つの噴水は有名だ。教会は広場からバルベリーニ博物館へと坂道を登りきった四つ角にある。この交差点は坂のてっぺんにあって交通量がめちゃくちゃ激しい。っていうかどの車も猛スピードでぶっ飛ばしてくる。死者がでないことが信じられない。坂を下ってRepublica駅から地下鉄に乗る。



1月4日

Tivoliに行く。

地下鉄BからTiburтинаFSとフレッチャロッサに乗り継ぐ。

フレッチャロッサの乗り場はEST3だ。ESTはフツウの乗り場からものすごく外れた場所にある。

TiburтинаFSから30分ほど山峡に入る。

しばらく急な勾配を登る。はるか遠くに小規模の都市がまばらに集

る。眼下に山峡が迫る。

Tivoliは煤けた小さな町だ。

駅近くの公園に水をはってスケートリンクをこさえて、こどもたちがぎやあきやあスケートに興じている。

エステ荘は山稜にたつ。世界遺産だ。

山の傾斜を利用した噴水と流水の涼しげな作庭はイタリア式庭園の典型で、グロッタをあちこちに設けている。

皇帝や貴族の別荘はTivoliに3つある。

ハドリアヌス皇帝と、グレゴリウス皇帝と、ここエステ家の別荘だ。いずれもTivoli駅から近距離だ。





この地でみなが普段に食べている料理である。



今日の食事が一番おいしいね。
 二〇二の駅前で食べたピザ。スライ
 スしたズッキーニを上のにせてチー
 ズをふりかけただけの薄いピザだ。
 パリパリしてとても美味しい。魚の
 てんぷらとコロッケもよかった。熱々
 のチーズがとろりと中に入ったライ
 スコロッケだ。米にはトマトソース
 がたっぷりしみこんでいる。

旧市街は中世の石畳がそのままで、
 狭い路地をくねくねと巡ることがで
 きる。改装もままならぬのか、不自由
 を感じながらも人々は住み続けている
 ようだ。洗濯物が軒先から路地へ思っ
 きりよく突き出している。駅前に新し
 い公団住宅がいくつか建設されつつあ
 る。分かる気がする。中世そのままの
 石造りは恐ろしく住みづらいのだろ

Ottaviano

Ottavianoのカフェ

OttavianoのカフェParentiとパニーニとピザついでにビールを頼む。ふっくらしたナスを薄く切ってパンにはさんだパニーニと、キュウリとズッキーニの間ぐらいの瓜のスライスをのけてチーズをふりかけた薄いピザだ。調理は簡単であるほど美味しい。ナスとズッキーニのみずみずしい甘さ。

ここは何度も来たけどやっぱり美味しい。Ottavianoといえぬこのカフェだよね。ここが最高！

あとからあとから客がくる。



でも、このカフェ。常連さんは甘いお菓子が目当てだ。ものすっごく甘い菓子だ。客は走りこむと、苦いコーヒーと甘い菓子で一息つく、たちまちほっこり笑顔になる。私たちも甘い菓子と苦いコーヒーを頼もう。

近所で土産を買う。チョコレートだ。

「さて、おっちゃん？
ローマってどうだった？」

教会つてめっちゃめっちゃすごい！

イタリアの建築は紀元前から1600年前後まで幅がある。ビザンチンからロマネスク、イスラム様式からゴシック、ルネサンス、バロックなど多様だ。時代も様式も大きく異なるそれぞれが、歩いて回れる距離でぎっしりと点在している。

教会とは建築、絵画、彫像そして哲学、あらゆる芸術が至高をめざして競う、その光の頂点に君臨した具象である。光の渦のまん中がローマだ。その一方で地方はどうだろう…

Tivoliでも感じたが地方は疲弊して

いる。そこいらに老人ばかりが目についた。製造業のない田舎は若者が生きるに厳しい場所だと思う。Tivoliは世界遺産を擁するがさほどの集客も収益も見込めない。Tivoliまでの沿線においても寂れた気配が感じられた。産業のない地方の貧困は深刻だ。日本の過疎と似ている。イタリアの陰だ。

光と翳

Ottaviano 界隈はアラブ人の露店が多い。€5のセーターや€1の下着をみな普通に買っていく。

Ottavianoに限ったことではない。沿線の出口や高架下にアラブ人の露台があって、安っぽい下着やセーター、靴、バッグなんかを売っている。

1月1日午前5時。まだ暗いうちにアラブ人のトラックが止まる。荷を下ろし、こまごまとした雑貨を並べるようだ。窓の下、暗闇でアラブの男たちが動くのが見えた。裏通りに露台を組み立てて商品を段ボールから出して、こっそり積み上げる。えっ!? いま1月1日の朝5時だよ。こんな時間にもう働いているんだ。

アラブの人たちは、こういった仕事に就くのかしらん？

レストランの厨房で働くアラブ人を見かけることはまだだが、残飯を廃棄する裏口で見ることはある。

路肩で目にする焼き菓もアラブ人だ。誰か買ったんだか？ 売れているように見えないが、いつみても菓を焼いている。なんでも売っている裏通りのスー



パーもアラブ人。夜遅かろうが日曜日であろうが商いしている。狭くて細い店構えは薄暗い。

教会がローマの日向の顔なら、石畳に這うように連なるアラブの露店は日陰の顔だと思う。光と陰。

ずっと昔むかし。古代ローマから異邦の露商はいた。彼らの存在を外してローマは語れない気がする。為政者がいれば隷従者がいる。覇者の数倍の隷属がいてこそ為政は保たれる。移民の流入は古代ローマにとって必須の要件であったはずだ。移民と露商、彼らの流れがローマの土台を培ったのだ。

そのダイナミックな潮流は教会の至高においても、道端の焼き栗にあっても、太古からローマをローマた

しめる陰翳であったと思う。光には翳がある。

日本に帰って……

1月のローマはすいていた。1月に行くのがいいね。コミコミじゃないからゆつくりできるね。単純ではあるが素朴な感想だ。

ヴァチカン美術館も2か月に3回も訪れたとなると、いいかげん、うんざり。

昨年の10月に加えて1月2日と3日の連続だ。ガラガラにすいていたからじっくり見た。もうもうジューブンだ。次は別の場所がいいな。フツウはそっ感じるだろう。

でも私たちは2020年の年末年始

もやっぱりローマ行きの航空券を予約した。12月30日から2021年1月4日までヴァチカンのマリオさんの部屋だ。

おっちゃん言う。「結局なんでも行く場所はイタリアってことになるんだな」

インチョウは思う。「どうしてイタリアなんだろう?」

1月5日にローマをあとにしたときは正直へ口へ口だった。

これでもかっ!どやさっ!という美術だ。恐ろしい量だ。限界だ。しばらくは見る気にならん…つんざりだ。ところだ。

どういことなんだろう?

帰国して1週間もしないうちに、「早く航空券を確保しないと今年の年末

にまたローマに行けなくなってしまう!」と焦っている。おっちゃんは血眼で航空券を検索した。こうして、まだ1月だというのに1年先の航空券を買ってしまうのだ。来年の正月もローマだ。

これってどうなんよ?

どういことなんよ!?

でも、やっぱりローマ!

ローマに行きたい!

この理由はどうぶん私たちにもわからないと思う。

14 あとがき

ゲーテのイタリア紀行を読んで

ゲーテが故郷のドイツからイタリアをめざして旅立ったのは1786年9月のことだ。そのうち1788年4月にローマを去るまでの1年半をゲーテはイタリアで過ごしている。そのときの日誌がイタリア紀行である。

なにげなくゲーテのイタリア紀行を読み返していま気がついた。これは面白い。とにかく面白い。どこを読んでもローマが近くに感じられる。親しんだ街をゲーテと一緒に歩いているような感覚にとらわれる。これはいったいどうしてだろう。ゲーテ

の歩いたイタリアは200年以上昔だ。にもかかわらず、ページを繰るたびに私たちが歩いたままの姿でローマがそこかしこに立ち現れるのだ。

ゲーテはドイツから南へブレンナー峠を下り、イタリア北部の町ヴェローナからヴェネツィアそしてボローニャをへてローマをめざす。ローマにしばらく滞在したのちナポリからシチリアを一周すると再びローマに戻る。その道中に見聞きしたことを日記風に記していく。今なら旅ログやフェイスブックだ。地方の食べ物、習俗、人々の仕事ぶり、気候。好奇心のままにずらずらと

綴っていく。とりわけ植物と地質は詳細かつ具体的に記していることから、ゲーテの強い関心が覗える。

イタリア紀行の前半、つまりドイツを出てからローマ、ナポリそしてナポリから船でシチリアに渡ってシチリア島を周遊し再びローマに戻るまでの9か月。1786年9月から1787年6月までの日誌は、おおよそ8割が自然の描写である。鉱石、岩盤、堆積層といった地学的な観察。そして植物だ。道すがら植生を観察しては『植物は棲息する環境によって進化する』という自説を論証する。そして天候だ。陰鬱な寒空に塗りこめられた北国ドイツのゲーテは、イタリアのまっさらに晴れた青い空や、薄暮に水蒸気が立ちのぼる山峡の靄

に、激しく好奇心をかきたてられた。尾根から気象が刻々と変ずる様を眺めることはゲーテを始終幸せにした。食べ物についての記述も多い。無花果などの果物や海の魚をめでている。

残りの2割は旅の道づれや宿で伝え聞いたよもやま話など仔細にメモしている。その5分は詩の韻法だ。さすがに詩人ゲーテらしい。発声法に興味を示す。ヴェネツィアでは歌劇や喜劇、詩詠などを盛んに鑑賞するのであるが、耳元に届くイタリアとドイツの言語の韻のありかた、抑揚、舞台での朗詠について書き留めている。全体の5分ほどがわずかに美術に関する記載であるが、スティーナ礼拝堂の最後の審判やラファエロのキリストの変容、アテネ



の学堂などを目録のように記すのみでほとんど詳しい講釈はない。彼がミケランジェロやラファエロをどう感じたのか？サンピエトロ大聖堂でどのように思いをさせたのか？日誌にも書簡にも彼の思考の跡はない。ゲーテが造形芸術から得た感慨はどこに行ったのか？詩人ゲーテの行方は如何に？

行き先はイフィゲーニエとタッソーだ。彼はドイツを出てより鞆に携えて歩いたイフィゲーニエを旅の宿で完成させ、タッソーの骨格を仕上げた。ファウストの構想を練り、エグモントの幾章かを逡巡しながら完成する。ゲーテがやつつけ仕事と称したエルヴィンとエルミールも半分まで書き進め、納得いかぬすえに仕上げ

ている。さらにウィルヘルム・マイステルにも着手して4章まで進めた。ゲーテは作品を練り、鞆に携え、また旅を続け、さらに推敲し、ようやく完成した作品を次々にドイツへ送ると出版する。こういった内省はすべてイタリアの旅宿だ。ゲーテはこう綴っている。

『ローマは大きな学校に入ったようなもので、なかなか卒業させてもらえない』
『美術上の練習を積まずに過ごす日は一日もない。蓋を開けて水中に入られた壘が容易に一杯になるように、ここローマでは感受性があり、心構えさえできておれば、わけなく充実させられる。美術的要素が常にあらゆる方面から押し寄せてくるからである』

この旅路でゲーテはゲーテになる。ゲーテはレオナルドが、ラファエロが、ミケランジェロがどうのと解釈を述べない。その感慨一切を封じ込めて、戯曲へ、詩作へと発酵させ蒸溜させ昇華させたのだ。

『故郷Strasbourgを離れて今日で丁度一年になる。私にとっては新しい生活への誕生日である。この一年をどのくらい私が有効に使ったかは、今のところ私自身にもまた他人にとっても評価ができない。この地で今始めて、私の研究が開始されたのである。この地で何を見、学びうるかは全く想像もつかないのである。他所では到底その間のことを理解できはしない』ここにイタリアでの創作に対するゲーテの意気込みが感じられるだろう。期待と満足と自

信が読み取れるのではないか。

二度目のローマ滞在は1787年6月から1788年4月までの1年弱だ。この頃から芸術論が中心を占めるようになる。彼は『ローマをいま離れては私は全く未熟の域を脱しない。それに私の著作を完成するためには必要なこのような平安は、他の何処に行っても見いだせないであろう』とローマに留まる決意を述べる。他人と交歓することも疎ましく感じるようで、ついには『ローマにあっても造形芸術をいっさい見ずして意識を集中せねば目下の課題である戯曲を完成できない』とまで思いつめる。彼は渉猟したルネサンス以降の美術論壇をさかに読んで『自分分は彼らが散り散りに研鑽したことを、一挙に解明する原理を解く鍵を

持っている』と彼なりに芸術を解釈する糸口を見出した感があるが『私は扉を開けた。そして敷居の上に立っている。が、遺憾ながら私は殿堂の中を見回し得るだけで再び立ち去ることになるであろう』と、その先へと一步を踏み出すことが容易ならざる障壁を悟る。ゲートは至高の峰に齒が立たないことを悟るが、一度目よりも二度目のローマ滞在のほう、より深く芸術を理解できる見識を養ったことをも自認する。

『今の私はあらゆる造形芸術への正しいまっすぐな道を眼前にながめ認識し、しかもそれだけ余計にはつきりと、道のはるかにして遠いことを測ることができる。ただ我々の眼前にちらつくのみで、精々のところその裾に手を触れるにすぎない』と。

そういうわけで、ゲートは当初の目論見であった「詩と真実」の続編としてイタリア紀行を世に出すことはかなわなかった。彼は自分流の芸術論を書き上げることはできなかったのだ。それほどにローマは難攻不落の城であった。

その代わりゲートはローマが、ナポリが、シチリアがどうであったのかを日誌にして世に出した。それがイタリア紀行である。

ゲートが俗物性を大いに発揮しているのがこの紀行文だ。そこでは普段着で旅をする俗人のゲートと、草稿を懷に携えて歩く詩人のゲートが生き活きと語らう。彼の凡俗性は満足せられ、のち文豪へと熟成したのだ。なるほど面白い。とても愉快だ。

不思議なことに200年前も私たちの

旅もまるでかわらない。道すがら目にした山岳地帯のごつごつした岩肌に、這うように繁茂する濃い緑、棘だらけの多肉、抜けるように青い空と海、港に水揚げされた大小の珍しい魚介と、それらを雑多に並べた市場。ぎつしりと隣接する屋台と宿屋。そこかしこに溢れる鮮やかな原色に目を奪われる。それがイタリアだ。そこにはゲートが北の陰鬱な曇天から解き放たれて高揚した心の軌跡が覗える。どの人もイタリアにあれば自己を素直に放つことができるのだ。

私たちもローマの旅にぐっちょり感動した。でも、どこがどうすごいのか？言葉にできないまま、また来年も来ようね…と日本に帰るのだ。た

ぶん来年も再来年もずっと。

ゲートのように旅をする。その地に滞在する。その地の人々と語らう。ただそれだけで、千古の民の天才的な所業に啓発され、ルネッサンスの巨匠の極意を知る。少なくとも解する手がかりを得る。そしてそれを齒が立たぬとも懷にだいたまま、自らの人生に深く沁み入らせるのだ。

ゲートがイタリアを旅したのは30代後半。イタリア紀行を書き上げたのが70代である。日記と手紙だけを資料にして記憶の彼方に眠っていたイタリアを呼び覚ますのだ。写メールもGoogleもない時代に。とんでもない所為だ。30年昔の出来事を、まるで昨日のことのように活写できようか。結局のところゲートは偉大な

物書きなのだ。30年昔の出来事も目の前で繰り広げられる劇場性をもって叙述する。ゲーテがゲーテを完結させるのは、このイタリア紀行を脱稿した晩年だと思う。それほどにローマはゲーテにとって長い長い宿題であった。

私たちがゲーテの「イタリア紀行」を初めて知ったのは4年ほど前にシチリア島を2週間かけて周遊したときのことだ。パレルモの植物園で珍しい植栽に思わず歩をとめた。なんと。その傍らにゲーテの碑があった。そののちカタニーアの大学でも、メッシーナ、タオルミーナ、エンナでもゲーテの足跡を目にした。私たちは断崖絶壁の頂にあるエンナの不思議な街を遠く裾野から眺めた

とき自然に言葉を失ったのだ。それは神が地上に遣わした虚構の街に思えた。

ゲーテは『シチリアなしのイタリア』というものは我々の心中に何らの表象をも作らない。シチリアにこそすべてに対する鍵があるのだ』と述べる。

まさにその通り！シチリアこそはすべての鍵だ。ゲーテはナポリからシチリアに渡る旅でローマという大きな呪縛から自らを解放する。心の底から南国の自然を楽しむ。こういう旅もやはりイタリアの醍醐味なのだ。シチリアなくしてイタリアは語れない。ローマが真正面を向いた能楽であれば、シチリアは喜怒哀楽のすべてを五感で表徴する猿楽である。そこには蛮族の混在する豪胆な

挑発がある。重厚かつ軽やか。この両極を自在に化身するのがイタリアだ。

イタリア紀行を読むと。

ゲーテが興味を覚えて観察したことの一つに卑賤の民がある。

ゲーテは雑多な人種が卑賤な仕事につく場所を好んで歩いた。ナポリの「呼び売り行商」が珍しかったのが詳しく記している。道端にひるげで即時で市場をこさえては、焼いた南瓜やリキュール、雑多なつまみ菓子、細々とした雑貨などを売り歩く「呼び売り行商」の姿に、彼らが人生を享樂する術を天から授かっているさまに心を動かされた。『みすばらしい檻樓をまとった貧民が大勢で下僕なり使い走りの仕事をしている。その様子は冗談半分にやっている

るかのごときで、まるでこどもの遊びみた態度にも見受けられる』『こうした卑賤の民は日々の暮らしを楽しむために汗して働いているかの如くだ』『彼らは心の動きが活発で機知に富み辛辣である』と。

身分の最下層に属する貧しい露商人がいかに勤勉に働き、かつ癒しを得ているかを見て、ゲーテは人生を享樂する術を得た稀有な国民性に驚嘆する。『貧しいもののほうが夜明け前から日暮れまで、いや深夜であるうと時間をいとわずに励むのであって、その姿は金持ちには想像すらできないであろう』

私たちが目にしたアラブの露商も元旦の朝5時、真っ暗闇でトラックの荷を積んでいた。ここでは古より労働すなわち人生の享樂これまさに生



きる糧となる。

労働と重なるのが昼間の過ごし方だ。『昼の時間というものの享楽ができ、特に夕方を楽しめる国では、夜になるということが極めて意味が深い。このとき労働は終わり、父親は帰宅して娘の顔を見る、夜になると朝から夕方までのいわゆる昼間というものがきっぱりと終わる』暗い雲霧に包まれて昼だろうが夜だろうが闇に閉じこめられ戸外で遊んだり散歩したりを許されないドイツでは、なじみのない戸外における時間の習俗だ。

戸外の過ごし方と通じるのが広場の意義である。

ゲートは、はなはだしく汚い家屋に住む人々が外にでられるものは、みな等しく戸外でわめいたり、ぶざけ

たり、歌ったりと、市場の狂騒や民衆の活気横溢なさまを記す。広場が糞尿や汚物塵芥で汚れても平然としている民衆に驚きを隠さない。イタリアのどこかしこにもある広場は、たとえそれが回廊を囲む貴族の広大な敷地であろうとも、民衆は我が物顔にそれを利用し糞尿を放擲する。広場に芬々と異臭を放つ夥しい汚物にゲートは公衆衛生の欠如を嘆く。

ゲートはヴェネツィアの干潟に運河の都市を建築した先人の知恵に驚く。干潮においてすら戦艦を配する運河の仕組みや、サンマルコ広場では潮の排水溝の技術を賞賛する。しかし、激しい雨量の高潮ともなれば、放置された塵芥が運河へとまぜ返され下水溝を詰まらせて広場が甚

の、イタリアの強さではないだろうか？

だしい悪臭の汚泥で浸水するのを見て、ヴェネツィア総督がなんらの施策を講じないことを不可解に思う。公共事業で苦も無く解決できるであろうにと。ところがひとたび干潮になって晴れ間がさせば汚泥と塵芥で浸水したことなどすっかり忘れてしまふ民衆のあっけらかんとした性分についても驚くのだ。

この章を書き終えた4月4日のいまCovid-19のイタリアの感染者が10万人を、死者は1万4千人を超えた。心の底から悲しい。無念だ。変わり果てたヴァチカンを見て悲痛に思う。

いま机に向かってゲートを読むとき、頭上にある太陽の熱を暮れなずむ最後の瞬間まで興じる人々の姿が、ありありと立ち上がるのである。広場のそこに溢れる陽気な音楽とおしゃべり。みな腹の底から

イタリアだけではない、スペインも死者の数は1万1千人、フランス6千5百人、アメリカ7千人。現在の日本の死者は63人だが、いつアウトブレイクしても不思議ではない。パンデミックは世界のどこにでも起りうる。

朗々と歌い飲み食べ踊る。彼らは雨がやんで空が晴れたら傘のことなどすっかり忘れるのだ。これがローマ

「最初はこのこんなに大事になるとは誰も思っていなかった。なので初めのうち政府も対応が真剣ではなかつ

でも。そしてこれからも。強靱でしなやかな国イタリア。

た。だからこうなったのだ」イタリアの主婦の街路のインタビューだ。突然マイクを向けられて、何気なく口について出た言葉だ。Coronavirusの災禍とゲートを見たイタリアのあっけらかんとした剛毅な楽天性は私には、どこかで同じ線上につながる気がしてならない。

千古より災禍をはねのけた民はこの先も自らの歴史をその上に重ねて、ますますの発展を遂げるだろう。この先、イタリアがこの難儀をどう切り抜け、どのように立ち直るのか？私は彼らの強靱な合理性としたたかな柔軟性を敬う。イタリアはいつ何時でも立ち直る。歴史はそれを証明してきた。この強さがローマだ。だからローマはローマたりえた。今ま

私たちは今年の年末もやっぱりローマに行く。必ず行く。絶対に行く。そしてマリオさんとマリオさんの母親と笑いながら世間話をする。教会や広場やミケランジェロを見て「うん…どこがどうすごいのか言葉にできないけど、やっぱりすごいネ！」といいながら「よしっ！来年も必ず来ようね」と帰路につくのだ。ちっとも歯が立たないよね。言葉にできないよね。でも何かずしりと重いものを心に携えて。

ローマ。ここには魂を充足させる天空世界がある。それは太古より災禍で命を落とした幾千万の民の魂のひ

とつひとつが至高をめざした犠牲のうえに築かれた宝である。命の輝きである。多くの死者に心より哀悼の意を表しローマが復興する日を信じて。

2020年4月4日記す

大橋永美

著者

大橋永美(おおはし えいみ)

1956年生まれ

医学部卒業 大学院博士課程修了

耳鼻咽喉科専門医

1998年より耳鼻咽喉科医院を開業

著者：「おっちゃんとインチョウのフランス旅行」(新星出版 2019年)

「Toravels of a Senior Couple in France」(ギャラクシーブックス 2020年)



参考図書

「ヴァチカン物語」塩野七生 石鍋真澄ほか とんぼの本 2011年
「ヴェネツィア物語」塩野七生 宮下規久朗 とんぼの本 2012年
「フィレンツェ美術散歩」宮下孝晴 佐藤幸三 とんぼの本 1991年
「新個人旅行 イタリア」昭文社 2011年
「甘くて、苦くて、深い素顔のローマへ」水谷渚子 イカロス出版 2016年

おっちゃんとインチョウのイタリア旅行

2020年7月1日 初版第1刷発行

著者 大橋永美

発行所 新星出版株式会社

〒900-0001

沖縄県那覇市港町2-16-1

T E L 098-866-0741

F A X 098-863-4850

© Eimi Ohashi 2020 Printed in Japan

ISBN978-4-909366-46-7 C0026

定価はカバーに表示してあります。

万一、落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします。